買地遺跡

平成11年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2000.3

茅野市教育委員会

KAICHI SITE

買地遺跡

平成11年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2000.3

茅野市教育委員会

(1) 遺跡上空遠景（東側から）

序　文

買地遺跡は平成11年度県営圃場整備事業米沢地区の施工に伴い、記録保存を前提に緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものであります。

買地遺跡は当初採集された遺物も少量で、規模等に不明確な部分がありましたが、今回の発掘調査によりその全貌が明らかになり、遺跡の性格が明確になりました。

発掘調査の結果、縄文時代早期末から前期初頭の竪穴住居址が５軒、中期初頭の竪穴住居址１軒と土坑が確認されました。本遺跡の立地する霧ヶ峰南麓は国宝土偶を出土した棚畑遺跡や、黒耀石製石器の製作遺跡と考えられている拠点的集落である国史跡駒形遺跡など多くの遺跡が点在する地域であり、本遺跡と駒形遺跡は指呼の距離にあり、その遺跡間の相互関係について興味深いものがあります。

霧ヶ峰南麓の考古学的調査は、古くより地元研究者の田實文朗氏や宮坂英弐氏等により行われ、黒耀石製石器の採集量の多さや遺跡の継続時期が長いとの特徴が指摘され、八ヶ岳西南麓に展開する遺跡群と性格の異なりがあることが考えられています。霧ヶ峰南麓に立地する遺跡群は黒耀石製石器の生産の場として捉えられ、石鏃等を製作し流通拠点としての性格が与えられていますが、今回の調査においてはこのようなことを検証する資料は得られてはいません。しかし、今回得られた情報をもとに今後この地域における生活領域の復元や遺跡間の相互関係、生業問題を解明することが必要です。

平成６年度上の平遺跡に始まった、米沢地区における埋蔵文化財の調査は、平成８・９年度一ノ瀬・芝ノ木遺跡、八幡坂遺跡、平成10年度向林遺跡、牛ノ児遺跡の記録保存がなされ、米沢地区における重要な歴史的情報を得ることができました。これらの情報を基に米沢地区における地域史が再編され、当地における縄文時代早期末から前期初頭や中期初頭のより具体的な生活の様子が解明されることでしょう。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地元地権者、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課の皆様の深いご理解とご助力、調査ならびに作業にあたられた皆様のご苦労により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成12年３月

茅野市教育委員会
教育長　両角　源美

例　　言

1．本書は、長野県諏訪地方事務所長香坂守義と茅野市長矢崎和広との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した平成11年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う、長野県茅野市買地遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査・遺物整理・報告書刊行は、長野県諏訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助平成11年度国宝重要文化財等保存整備費補助金市内遺跡発掘調査並びに県費補助金平成11年度文化財保護事業補助金市内遺跡発掘調査、市費を得て、茅野市教育委員会が平成11年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第１節４．調査の体制として記載してある。

3．発掘調査は平成11年５月20日から６月30日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は発掘調査終了後茅野市文化財課において行った。

4．発掘調査から本書作成までの作業分担、執筆分担等は第Ⅰ章第１節２に記してある。

5．本報告に係る出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財課で収蔵保管している。

凡　　例

1．調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

2．本報告書に掲載の住居址・土坑の遺構実測図は1/60、土器実測図は1/3･1/6、土器拓本1/3、大型石器は1/3、小型石器2/3の縮尺とした。

3．土層の色調については『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

4．挿図中におけるスクリーントーンは遺構部分では焼土、遺物のインレタは繊維含有状態を示した。

目　　次

巻頭図版
序　　文　　茅野市教育委員会　教育長　両角源美
例　言・凡　例

第Ⅰ章　発掘調査の概要……1
　第1節　発掘調査に至るまでの経過……1
　　1．調査に至るまでの協議……1
　　2．発掘調査の方法とその経過……5
　　3．調査日誌（抄）……5
　　4．調査の体制……5
　第2節　発掘された遺構・遺物の概要……6
　　1．縄文時代の概要……6
　　2．遺物の概要……6

第Ⅱ章　遺跡の概観……7
　第1節　遺跡の位置と環境……7
　　1．遺跡の立地と地理的環境……7
　第2節　遺跡周辺の歴史的環境……7
　　1．遺跡周辺の遺跡とその地理的位置……7
　　2．遺跡の研究史……9

第Ⅲ章　遺跡の層序と調査区の概要……10
　第1節　調査区の基本的層序……10
　　1．土層の基本的な堆積状況……10
　　2．土層の成因と性格について……10

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物……11
　第1節　縄文時代の遺構と遺物……11
　　1．竪穴住居址……11
　　2．縄文時代早期末～前期初頭の遺構の構成……21
　第2節　縄文時代・平安時代・近世・近代の遺物……22
　　1．縄文時代の遺物の概要……22
　　2．平安時代の遺物の概要……22
　　3．近世・近代の遺物の概要……22

第Ⅴ章　調査の成果と課題……24
第１節　買地遺跡出土縄文時代早期末から前期初頭の土器群について……24
１．買地遺跡遺構内の土器群の構成……24
２．買地遺跡含繊維縄文施文土器の分類……24
３．買地遺跡における含繊維縄文施文土器の変遷……25

図　版

第Ⅰ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査に至るまでの経過

１．調査に至るまでの協議

遺跡確認に至るまでの経過　本遺跡は畑地耕作がなされ、また、周辺が宅地・原野のために遺跡の内容等について不明であった。県営圃場整備事業米沢地区の対象地となった時点で、地域の確認を行い少量の黒耀石剝片が採集されたことにより、遺跡の存在が明確となった。しかし、その規模や時期・性格が不明で、特に遺跡の広がりについては不明な部分が多かった。

平成６年度に農業基盤整備事業にかかる茅野市、原村内の分布調査が長野県教育委員会により計画され、６月米沢地区北大塩地区の表面採集調査が行われた。その結果買地において縄文前期前葉土器片２、中期初頭から中期後葉土器片７、時期不明土器片15、黒耀石475ｇ、石鏃１が採集され、縄文時代中期の集落の可能性が考えられ、平成６年９月６日付６教文45－３号の遺跡発見通知をもって買地遺跡（茅野市遺跡番号312）を新規遺跡として登録した。

遺跡範囲確認のために対象地周辺の表面採集や試掘調査により、遺跡範囲の確定や遺跡内容の確認を目的に、平成９年12月16日・17日の２日間に亘って重機による試掘調査が実施された。その結果時期不明の竪穴住居址１が台地の斜面部に検出されただけであり、小規模な遺跡として捉えられた。

本調査に至るまでの協議経過と諸事務　平成11年１月14日、２月16日に平成11年度圃場計画地内の遺跡の保護協議が長野県教育委員会文化財保護課・諏訪地方事務所土地改良課・茅野市土地改良課・茅野市教育委員会文化財課により行われ、結果記録保存の方向が決定された。この協議結果は県営圃場整備事業米沢地区着工に先立ち1,800㎡以上の発掘調査を実施し、発掘調査に係る経費は、事業主体者が負担する。ただし、経費のうち農家負担分（12％）については文化財保護側が負担する。この計画は総額7,200,000円（農政部局負担6,336,000円、文化財負担864,000円）で事業を行い、発掘調査は茅野市教育委員会に委託するというものであった。

平成11年度の圃場関係の調査計画については、平成10年12月平成11年度文化財関係補助事業計画を提出して事業に備えた。当初計画よりも遺跡規模等が縮小したため年度途中に全体計画を見直し、変更申請を提出し全体計画を総額3,740,000円（農政部局負担3,291,000円、文化財負担449,000円）で事業を行った。　保護協議結果を受けて平成11年４月15日付11諏地土第34-３号、埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書を諏訪地方事務所長香坂守義と取り交わした。

発掘調査による文化財補助金申請等事務経過

平成11年４月７日　11教文第１号　平成11年度文化財関係国庫事業（埋蔵文化財関係）について（通知）

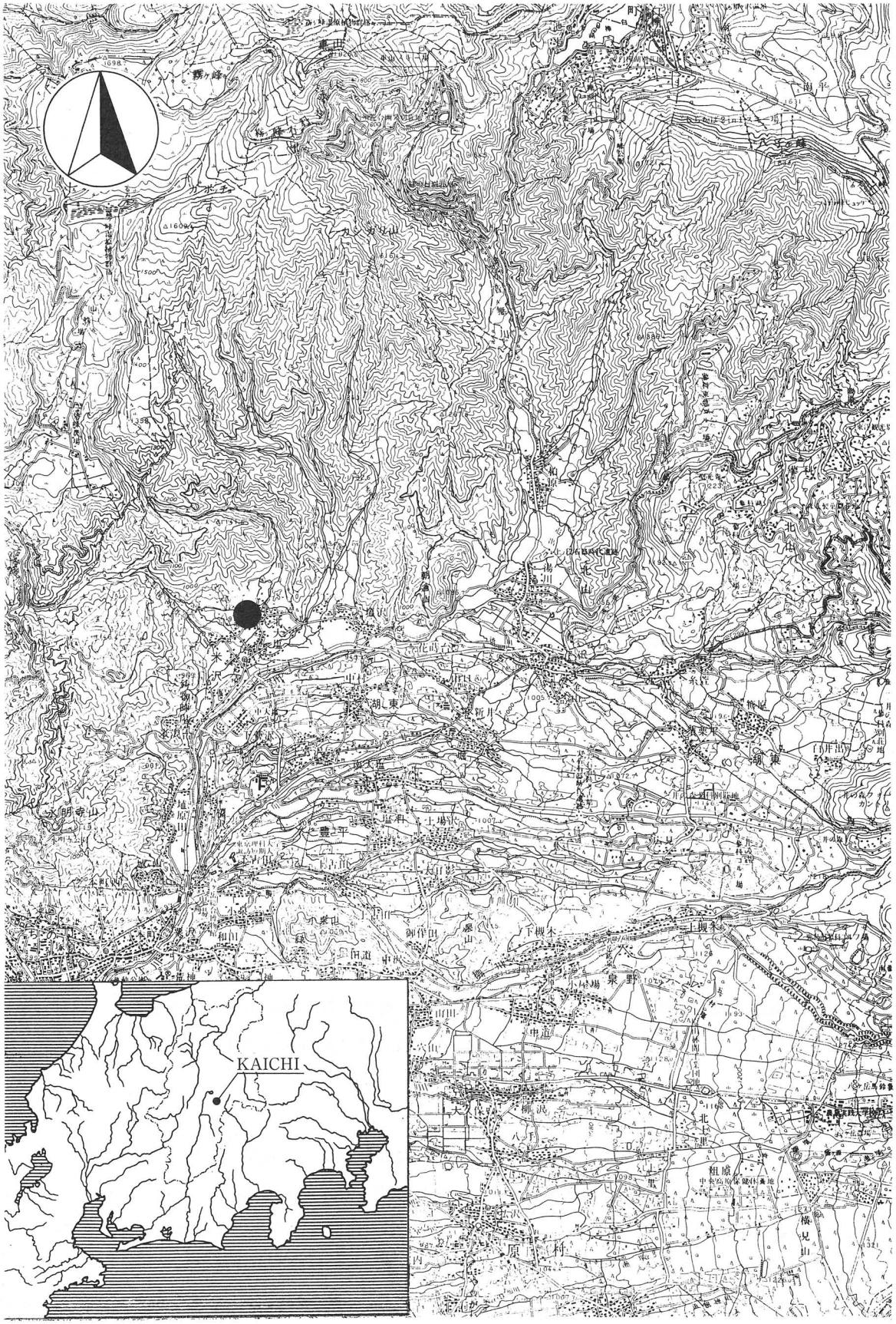
平成11年４月７日　11教文第２号　平成11年度文化財保護事業（埋蔵文化財関係）の内示について（通知）

平成11年６月８日　11教文第６－１号　平成11年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

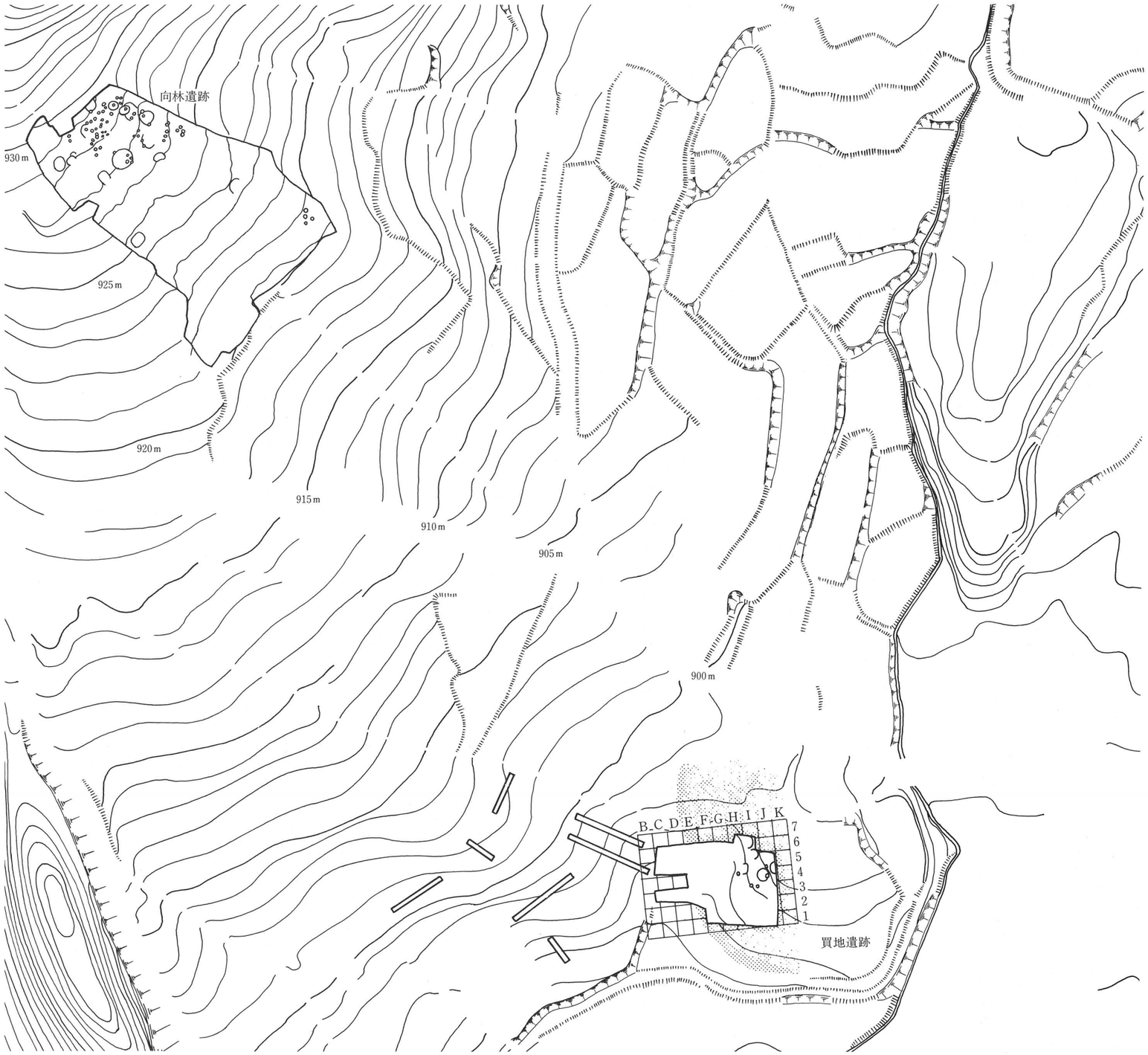
平成11年６月８日　11教文第６－２号　平成11年度文化財保護事業補助金申請書提出

平成11年11月24日　11教文第80-１号　平成11年度国宝重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出

平成11年11月24日　11教文第80-１号　平成11年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出



第１図　買地遺跡位置図（1/37,500）



第２図　周辺地形と発掘調査区（1/1,500）

発掘諸法令事務の経過

平成11年４月15日　11教文第６-10号　買地遺跡埋蔵文化財発掘通知（57条３第１項）の提出

平成11年４月21日　11教文第９-２号　買地遺跡埋蔵文化財発掘通知（98条２第１項）の提出

２．発掘調査の方法とその経過

調査区の設定と発掘調査の方法　試掘調査により遺構は台地斜面範囲に点在していることが把握された。この試掘調査結果をもとに調査範囲を決定し、最終調査面積は939㎡となった。調査区のグリッド設定は、公共座標Ｘ＝3660、Ｙ＝-28240、標高895.115ｍを基準とし、５ｍピッチのグリッドを設定した。

遺構測量　遺構の測量は平板測量を実施しこの図を基本としたが、遺物の平面分布、遺物の出土状態や土坑内の礫等については、遣り方測量の成果を平板測量図に反映させた。基本土層の観察は、畑地内は耕作等の関係よりプライマリーな土層堆積を示している地点はなかったが、最も土層の遺存状態の良好であったＨ－６東壁において行った。平面図作成作業と、レベル測量を並行して行った。なお、発掘現場における諸記録は守矢昌文、遠藤佳子、塩原博子、篠原リカ子、宮坂ひとみが携わった。

３．調査日誌（抄）

５月20日　本日より本格的な調査に入る。テント及びシート等の機材を搬入する。重機を用いて発掘調査に入る。遺跡東側台地頂部より表土剝ぎ作業を実施する。

５月25日　重機を用い遺構確認の継続。調査区北西側台地斜面や、東側に縄文時代の遺構が検出さる。

５月28日　重機による排土処理を本日で終了。遺構確認作業の継続。第１号・第２号住居址の掘り下げ。

６月１日　第１号・第２号住居址の遺物出土状況の清掃作業後、写真撮影を実施する。第１号住居址セクション図作成及び土層観察を実施する。

６月２日　第２号住居址までの調査に入る。第２号住居址覆土内に一括土器が検出され精査に入る。

６月３日　本日関東甲信越地方が梅雨入りとなる。第２号住居址掘り下げ継続、覆土内一括遺物の取上げ。

６月８日　梅雨を感じさせない爽やかな日で作業がはかどる。第２号住居址の精査に入る。調査区北西側は数軒の竪穴住居址が重複するようで、平面プラン把握に手間取る。

６月10日　第２号住居址の遺物取上げ。床面直上より縄文時代中期初頭深鉢口縁部が逆位の状態で出土する。

６月15日　調査区全域の清掃作業と写真撮影。全域の遺構全体図作成。

６月30日　調査区最終点検と機材の搬出作業を終了する。

４．調査の体制

調査主体者　両角源美　（茅野市教育委員会教育長）

事　務　局　宮坂泰文　（茅野市教育委員会教育次長）

矢嶋秀一　（文化財課長）　鵜飼幸雄　（文化財課文化財係長）　守矢昌文　小林深志

大谷勝己　功刀　司　小池岳史　百瀬一郎　小林健治　柳川英司　大月三千代

調査担当者・報告書執筆　守矢昌文　　調査補助員　牛山徳博　太田友子

発掘調査・整理作業協力者　内田友一　遠藤佳子　小松　要　塩原博子　篠原リカ子　長石頼文

樋口明男　樋口　豊　樋口美智代　前島克夫　宮坂　勇　宮坂ひとみ　三輪辰秋

吉田幸男　吉田　實

発掘調査期間中、遺物整理期間中、諏訪地方事務所土地改良課並びに、米沢区圃場整備委員会を始め地権者の方々にご助力頂き、調査を円滑に進めることができた。謝意を表し明記したい。長野県教育委員会文化財・生涯学習課埋蔵文化財係指導主事原　明芳氏をはじめ下記の方々より有益なご指導・ご助言を頂いた。

記して感謝を申し上げたい。

第２節　発掘された遺構・遺物の概要

１．縄文時代の概要

検出された遺構の概要　検出された遺構は縄文時代早期末～前期初頭・中期初頭竪穴住居址と土坑だけである。

縄文時代早期末～前期初頭の竪穴住居址は５軒を調査したが、調査範囲は遺跡全体の極一部に過ぎず、調査範囲外にも多くの遺構の展開が予想され、ある程度まとまったのムラが構成されていたものと考えれる。

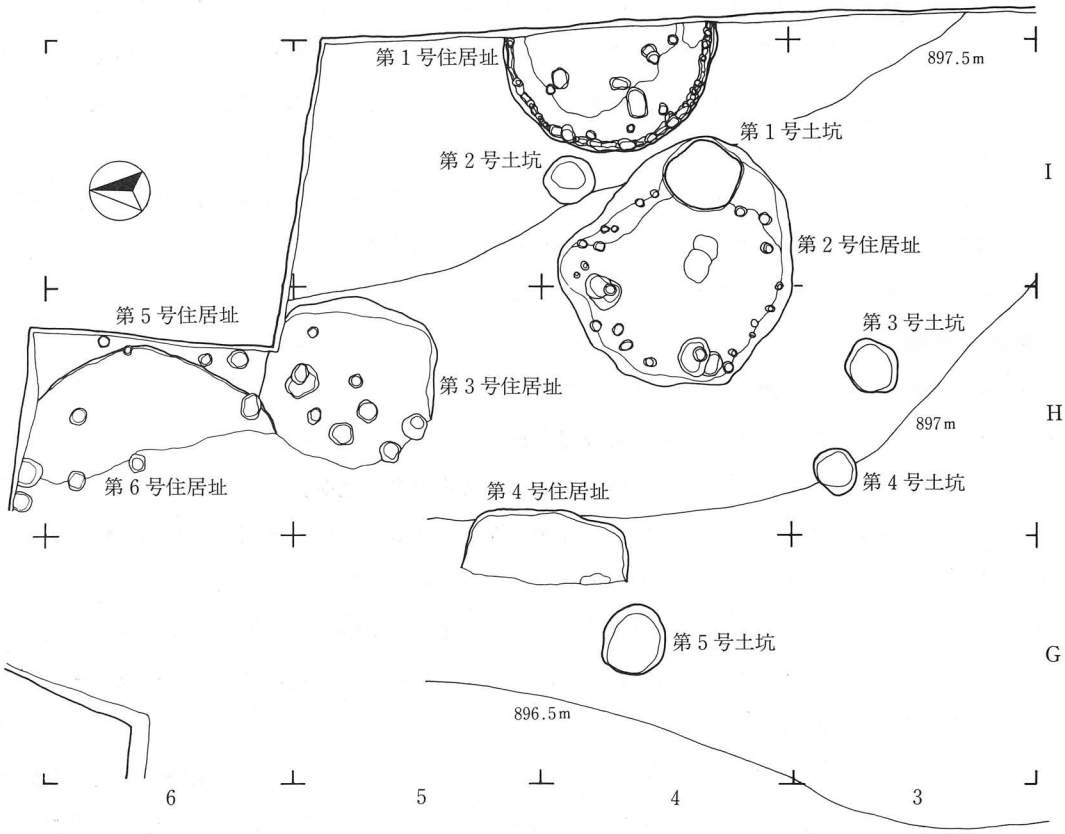
２．遺物の概要

検出された遺物の概要　検出された遺物の量は縄文時代の集落の割りには、その量は多くなく、検出された遺跡内出土土器は総量にして31,755ｇを測った。

縄文時代の遺物　遺物の主体をなすものは縄文時代早期末～前期初頭と中期初頭土器で、これらの時期に伴うと思われる黒耀石剝片や打製石斧等である。

平安時代・近世・近代の遺物　遺構に伴うこの時期の遺物は得られてはいないが、表採において、平安時代土師器坏片１が採集されている。

近世・近代に帰属する資料は瀬戸・美濃窯系陶磁器が主体となり、灰釉丸碗、染付丸碗、灰釉小瓶、銅緑釉瓶掛が、近代磁器では瀬戸・美濃窯系印版染付皿、碗、灰釉練鉢片が得られている。これらの18世紀後半から20世紀初頭の資料は、遺構に関わるものではなく、近世・近代の耕地造成や耕作に伴って耕作地に混入したものと捉えることができよう。近世の米沢地区の開発の状況を探る上に貴重な資料と言えよう。



第３図　遺構全体図（1/150）

第II章　遺跡の概観

第１節　遺跡の位置と環境

１．遺跡の立地と地理的環境

遺跡の位置　買地遺跡は長野県茅野市米沢5,544番地他に所在する。霧ヶ峰山塊は市域の北西隅に占地し、調査地のある買地遺跡はＪＲ中央本線茅野駅から北東方向に約６kmのちょうど霧ヶ峰南麓のほぼ中央部よりやや東側にあたり、遺跡の位置する下方に米沢北大塩の集落が位置する。

遺跡の地理的環境　向林遺跡の位置する霧ヶ峰南麓は永明寺山・朝倉山・カシガリ山が位置し、これらの山裾からは東より藤原川・前嶋川・桧沢川・横河川等の小河川が流れ下り、山裾に扇状地を形成する。

この霧ヶ峰南麓地域を巨視的に見ると、大きく内彎し霧ヶ峰南麓から流下する河川により浸食され、大きく３ブロックに分かれる。分断された地域内は河川による扇状地が発達し、扇状地単位で遺跡が群となる傾向が見受けられる。これらの扇状地に接する形で上川による沖積地が発達しており、扇状地と沖積地との接する部分に、東より塩沢・一本木・北大塩・鋳物師屋・埴原田の集落が展開する。霧ヶ峰南麓を流下する河川により浸食されている谷を遡ると、その源流は霧ヶ峰池のくるみにまで至り、霧ヶ峰のなだらかな丘を進むと、黒耀石の原産地である和田峠周辺となる。本遺跡から黒耀石原産地までは直線距離にして約16kmを測りその距離は約１日行程の範囲にある。

本遺跡は霧ヶ峰南麓に多い扇状地地形の末端に形成された残丘状の独立丘に立地する。この独立丘は、遺跡北西の山裾が崩落し所謂ホウロク地形となった部分より小河川に沿って流下し堆積した扇状地と西側で接しており、丘基部は扇状地の扇端部が被るような状況となる。遺跡は独立丘の頂部と西側斜面部に位置している。遺跡の立地している独立丘は頂部が平坦で眺望がよく、遺跡西側に谷が入り込み、小河川の流下する沖積地が南側に広がる生活適地である。

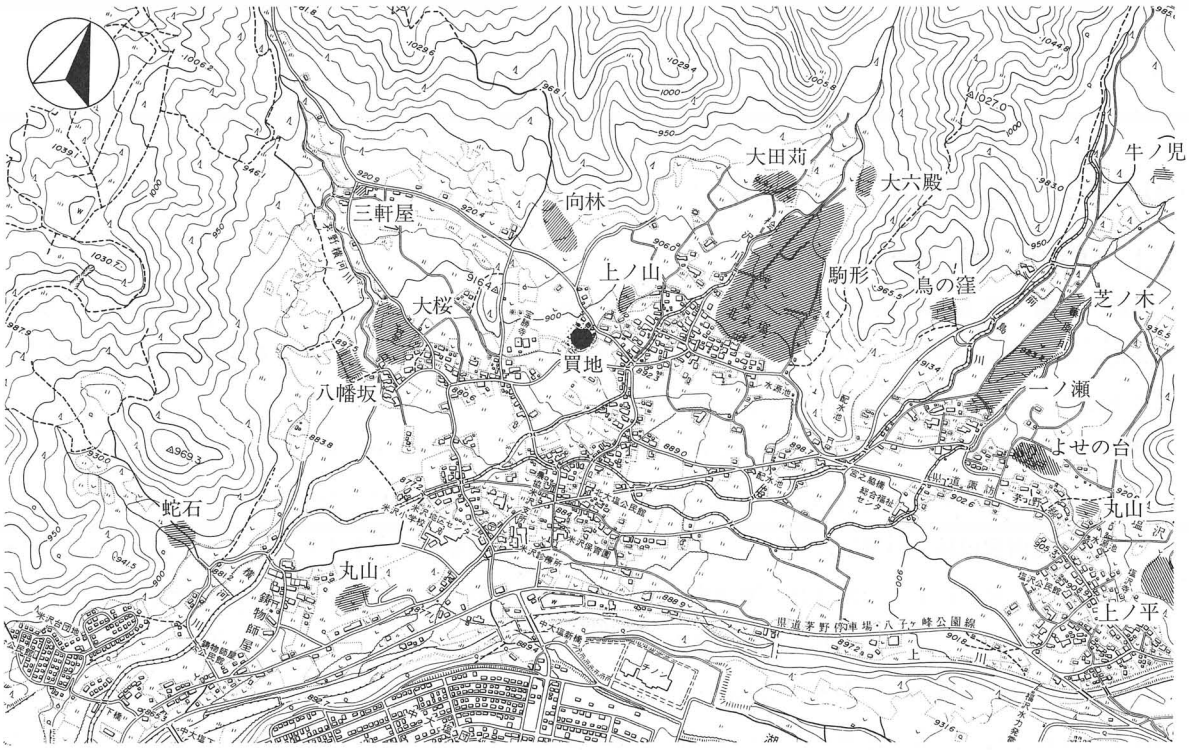
霧ヶ峰南麓は市域において湧水の豊富な地域で、市最大の水源である大清水などがある。このような湧水は霧ヶ峰南麓の伏流水が中心となり、遺跡東側に位置する谷には、毎時変わらぬ湧水が認められ、小河川となる。また、雨天の日が続くと西側に入り込む入り組み谷の基盤礫層内より水の滲み出しが認められる。

第２節　周辺の歴史的環境

１．遺跡周辺の遺跡とその地理的位置

周辺の遺跡の地理的位置　霧ヶ峰南麓は霧ヶ峰山塊の支峰である朝倉山から永明寺山までの約3.6kmに亘る。この地域は大きく弧状となり、藤原川・前嶋川・桧沢川・横河川等の河川が流れ下り、これらの下部には扇状地が発達する。これらの扇状地や崖錐地等には遺跡が展開する。これらの遺跡は大きく扇状地単位に大きなグループを形成している。また、扇頂部にあたる藤原川・前嶋川・桧沢川・横河川の沢筋の一部には、黒耀石が散布する地点が認められ、黒耀石の運搬ルート(文献１)に関わったと想定されている。

桧沢川による扇状地のグループ　桧沢川により形成された扇状地は霧ヶ峰南麓の内で最も幅広い扇状地を形成している。この最も広い扇状地の扇頂部に菖蒲沢遺跡、大六殿遺跡、扇央部に駒形遺跡が立地している。これらの扇状地端部にはやや特異な孤立台地状の地形が形成され、上の山遺跡・買地遺跡が立地する。また、扇状地を望む山裾の斜面台地には大田刈遺跡が占地する。桧沢川による扇状地グループの代表的な遺跡は次



第４図　周辺の遺跡とその地理的位置（1/20,000）

のようである。

駒形遺跡　桧沢川の形成した扇状地の扇央部に位置し、標高は910ｍを図る。遺跡の中央には駒形社の石祠が祀られ、「駒見石」と呼ばれる巨石や牧にちなむ小字が残る点などより信濃十六牧の一つである山鹿牧または大塩牧との関連も想定されている。遺跡は古くから土器や石器の採取地として著名で、米沢地区の考古学的調査を精力的に行った田實文朗氏も常に実踏されていたようで、多量の黒耀石製石器等を採集している。昭和36年に諏訪実業高校地歴部が、尖石考古館宮坂英弐氏の指導により発掘調査を実施し、縄文時代前期前半１、中期後半１の竪穴住居址、後期配石遺構、土坑が検出されている。（文献２）昭和41年に第２次調査を実施し、縄文時代中期後半竪穴住居址２が検出されている。（文献３）平成６年に長野県教育委員会により農業基盤整備事業に係る茅野市、原村内の分布調査が実施され、その一環として県営圃場整備事業の計画されている北大塩地区の縄文時代遺跡について、駒形遺跡を中心に試掘調査を伴う詳細分布調査が実施され、縄文時代早期末～前期初頭４、前期初頭２、前期前半２、中期中葉４、中期後半10、不明５の竪穴住居址、旧石器時代、縄文時代早期末から後期末、平安時代、中世、近世の遺物が検出されている。また、従来より注目されていた黒耀石も重量にして20kgもの原石・剥片・砕片が採集されている。調査により本遺跡が拠点集落で黒耀石製石器生産に関わっていた可能性が考えられている。これらの成果をもとに平成９年度国史跡に指定された。（文献４）

大六殿遺跡　駒形遺跡の立地する扇状地扇頂部に位置し、標高は930ｍを測る。表面採集により縄文時代中期土器片、石鏃、黒耀石剥片が採集されている。本年度発掘調査が行われ、縄文時代早期前半１、前期末４、後期前半３の竪穴住居址、中期初頭小竪穴１、後期配石１、土坑約150、平安時代竪穴住居址２が検出されている。小規模ながら各時期の遺構が点々と認められる点や立地等より考えると本遺跡は駒形遺跡の支村の可能性が強い。（註．１）

菖蒲沢遺跡　大六殿遺跡と桧沢川を隔てた扇状地扇頂に位置している。平成６年に長野県教育委員会により実施された米沢地区の実地踏査がなされ、縄文時代前期中葉土器片、黒耀石剥片、打製石斧、平安時代灰

釉陶器片が採集され、遺跡の確認がなされた。平成９年に圃場計画対象範囲について試掘調査を実施し、その結果、本遺跡は扇頂部の狭い範囲に位置する散布地的なものであることが確認された。

大田苅遺跡　桧沢扇状地を臨む山裾に開けたテラス状の台地に位置する。平成６年に長野県教育委員会により実施された米沢地区の実地踏査がなされ、縄文時代前期後葉、中期中葉土器片、黒耀石剝片が採集され遺跡の確認がなされた。平成９年に圃場計画対象範囲について試掘調査を実施しその結果、縄文時代前期前半、中期初頭の竪穴住居址、土坑、黒耀石集積が検出された。本年度調査（註．２）が行われ縄文時代前期末９、中期前半１、後期前半１の竪穴住居址、土坑200が検出されている。規模的や遺構の密度、遺物の出土傾向を考慮すると、大六殿遺跡と同様に拠点的集落である駒形遺跡の支村の可能性が高い。

出ノ脇遺跡　桧沢扇状地を臨む山裾に位置する遺跡で、平成６年に長野県教育委員会により実施された米沢地区の実地踏査の際に確認された。黒耀石剝片が若干散布しているだけの小規模な散布地で、平成９年に試掘調査を実施した結果、遺構等の確認はなされず、隣接する大田苅遺跡との関係より大田苅遺跡に付属する散布地の可能性が高い。

上の山遺跡　本遺跡は桧沢川扇状地の扇端部に張り出す残丘状の尾根状台地に位置し、標高は900ｍである。縄文時代中期土器片、石皿、石棒、石鏃等が採集され、また、耕作において縄文時代中期後半の深鉢も出土しており、中期の小規模な集落と考えられている。

向林遺跡　買地遺跡の西北に隣接する扇状地に位置する遺跡で、平成10年（文献５）に圃場整備事業に伴い発掘調査が行われ、縄文時代早期前半12、前期末１の竪穴住居址、平安時代竪穴住居址１が確認されており、早期前半の集落であることが確認されている。また、住居址は確認されてはいないが、縄文時代早期末の土坑や遺物、前期末の住居址が検出されていることより、買地遺跡との関連を考える上に重要な遺跡である。住居址の在り方や遺構数から断続形の小規模集落であると考えられる。

霧ヶ峰南麓遺跡群の展開　霧ヶ峰南麓特に米沢地域において遺跡が、地形的な制約等から大きなグループを形成している。これらの遺跡はその位置関係や遺構の時期構成からみると、縄文時代において大きなまとまりを形成していたと考えることができ、扇状地単位や遺跡立地より小グループにまとまる傾向が認められる。また、先学によって多く述べられているように、黒耀石製石器加工を中心とした縄文時代の生業を推定でき得る地域として理解されている。今回調査された買地遺跡は周辺の地形や、遺跡群との在り方より桧沢川を臨むグループに帰属させることができよう。

２．遺跡の研究史

今回の発掘調査以前の考古学的調査　本遺跡は宮坂英弐氏著『原住民族の遺蹟』（文献６）石器時代遺蹟及び遺物発見地名表によると、北大塩地区の項に買地が挙げられ土器・凹石・石鏃・磨石斧の採集が記載されている。本遺跡は昭和54年度に長野県教育委員会が実施した八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査においてはその存在が不明確であった。平成６年に実施された農業基盤整備事業に係る茅野市、原村内の分布調査－八ヶ岳西南麓縄文時代遺跡群分布調査－の実施により、縄文時代前期前葉土器片２、中期初頭１、狢沢１、藤内４、曽利IVV１、時期不明15、石鏃１、黒耀石475ｇが採集され、平成６年９月６日付６教文第45-３号をもって新たに遺跡発見届を提出し登録を行った。

遺跡の内容や範囲が不明確なために、平成９年12月16日・17日に試掘調査が実施され、竪穴住居址と思われる落ち込みが１ヶ所台地西側に検出され、集落址として認識された。本調査の結果、試掘調査により確認された落ち込みは、谷部の入り組み肩部であることが判明した。

第Ⅲ章　遺跡の層序と調査区の概要

第１節　調査区の基本的層序

１．土層の基本的な堆積状況

本遺跡の立地している台地西側に接する扇状地は、霧ヶ峰起源の火山堆積物である泥・砂・礫を基盤とし、この上部に霧ヶ峰南麓際から崩落し堆積した巨石や礫を多量に含む二次堆積の砂状のロームが堆積する。これに有機物腐食物の堆積物である黒色土が堆積し台地全体を形成しているのに対して、本遺跡の立地する台地の状況はやや異なり、霧ヶ峰起源の火山堆積物である泥・砂・礫を基盤層上に有機物腐食物の堆積物である黒色土が堆積し、扇状地形に見られる巨石や礫を多量に含む二次堆積の砂状のロームの堆積は見られず、巨石や礫等の露出は認められない。

調査区全体は畑地造成により、西側斜面が大幅に地形が改変されており、プライマリーな土層の堆積状況を調べられる地点はごく限られた部分だけある。下記に説明を加えてある地点は調査区の最も土層堆積の深い部分である東側壁のものである。発掘調査において縄文時代早期後半から中期後半の遺物が検出されているが、的確な時期的な包含層の把握や生活面の分層には至ってはいない。

Ⅰａ層　耕 作 土　色調は黒褐色（10YR2/2）を呈する。締まりが少なく、全体的にややザラつく。内部に１㎜大の石灰粒子を１％含有する。現在耕作されている畑の耕土で地表に畝痕が観察される。

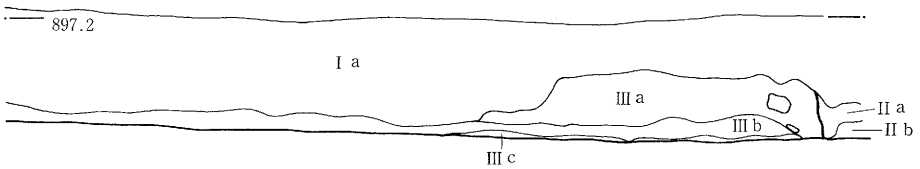
Ⅱａ層　褐 色 土　第３号住居址の覆土で、色調は褐色（10YR4/4）を呈し、締まりがよく割合硬質で、内部に１㎜大の砂粒を２％含有する。本層の上面より第３号住居址の掘り込みが確認される。

Ⅱｂ層　褐 色 土　第３号住居址の覆土下層に堆積する土層で、色調は褐色（10YR4/6）を呈し締まりはよく硬質で、内部に１～２㎜大のローム粒子を４％含有する。

Ⅲａ層　暗褐色土　調査区の北側範囲の台地頂部より西側斜面に堆積している土層で、締まりがあり、割合硬質である。色調は暗褐色（10YR3/4）を呈する。内部に２㎜大の炭化物粒子を３％含有する。

Ⅲｂ層　褐 色 土　色調は褐色（7.5YR4/4）を呈する。内部に２㎜大の粒子を５％含有する。第５号住居址と思われる遺物が含まれる。

Ⅲｃ層　黄褐色土　黄褐色（10YR5/6）を呈し、硬質で締まりがあり、床を思わせるような質感を持つ。



第５図　遺跡の基本層序（1/4）

２．土層の成因と性格について

遺跡に堆積する土層を大きくその性格よりⅠ層からⅢ層の３群に分類した。Ⅰ層群は現在の畑地耕作に関わる土層群で、Ⅰａ層がその状況より耕土と思われる。Ⅱ層群内は大型農耕機械による攪乱を受けている状況が観察される。Ⅱ層群は第３号住居址の覆土と思われる土層で、上面に攪乱が至っている。Ⅲ層群は第５号住居址の覆土に相当し、Ⅲｂ層内に遺物が包含されていた。Ⅲａ層がⅡａ層に切られている点から第５号住居址の覆土に第３号住居址を掘り込んだものと考えられる。

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１．竪穴住居址

縄文時代の竪穴住居址の番号は第６号まで付されているが、住居址の全容を把握し得たものは第２号住居址だけで、後の５軒については調査区に位置していたり、地形の関係より流出しており、平面プランや構造等については不明な部分が多い。

これらの住居址を時期より見ると縄文時代早期末５、中期初頭１に帰属し、縄文時代早期末の住居址の第３号・第５号・第６号住居址を除き重複関係はない。

第１号住居址（第６・７図・図版１）

検出状況　本址の位置は調査区の東側Ｉ－４・５グリッドで確認されたものである。住居址は台地の頂部に近い位置に占地し、西側に第２号住居址と近接する。東側のプランは調査区外に位置する関係より住居址の全容を把握することはできなかったが、明瞭な掘り方を有していた西側の部分より住居址の平面形プランを想定することができた。

遺構の構造　住居址の平面形プランは、やや北－南方向につぶれる不整円形が予測できる。規模は直径4.12ｍで、規模的には一般的な住居址である。

壁の立上りは検出できた南・西・北側共に明瞭な掘り方を確認できた。壁は地形が西側に傾斜を持つため西側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な北側で15.3cm、南側で15.3cm、西側で14cmを測る。壁の掘り方は直に近い形で、明瞭に掘り込まれており、壁の立上りは割合直線的で断面形がＬ字形を呈し、床際が割合鋭角に立ち上がる傾向が見られる。

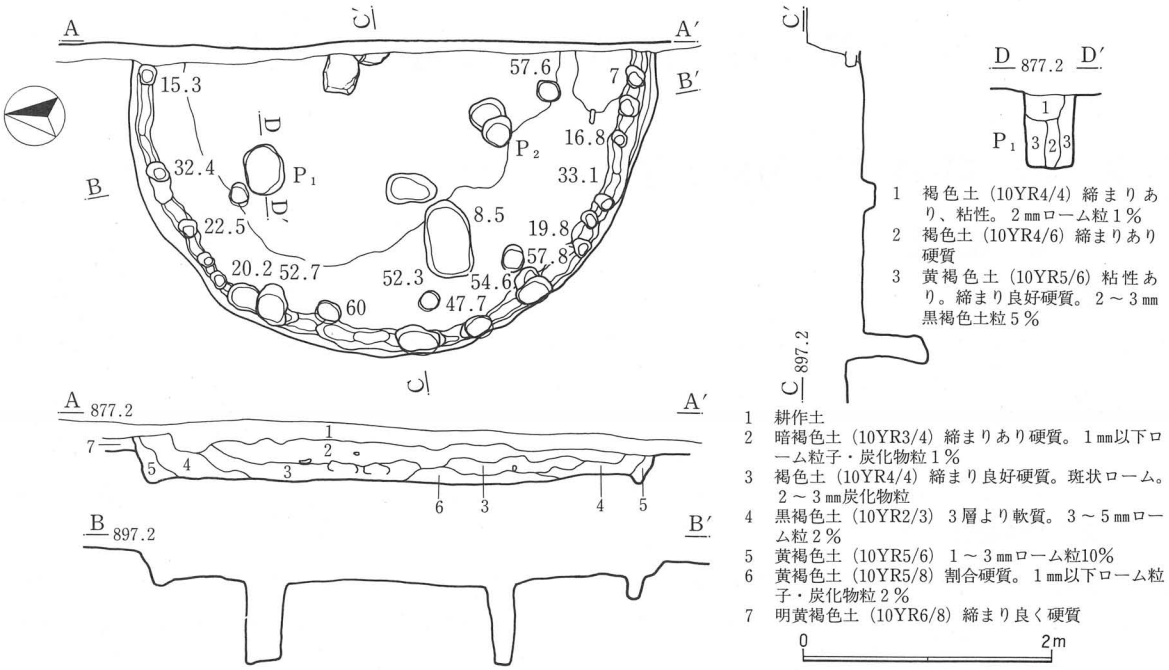
直接地山のローム面床としており明瞭であるが、特に南側周溝際に敲き締めたような硬化した土間状の床面を確認することはできた。床面は中央部に向かい緩やかな傾斜を持ち皿状の窪みとなる。

周溝は壁際を全周している。周溝の掘り方は明瞭で、断面形は丸みを持つ。周溝内には小孔が穿たれ、その一部は小柱穴状で、その深さは深く一定の距離を持ち巡る点に特徴を持つ。これらの深さは様々であるが、一定の距離を有するものは概して深いものが多く、直に掘り込まれる傾向が認められる。これらの中で特にP_4（深さ52.7cm）、P_5（深さ51cm）、P_6（深さ54.6cm）は等間隔で住居址西側範囲、ちょうど谷部斜面を臨む位置に構築されており、その位置等より住居址入り口部の施設に関わるピットの可能性が高く、これらのピットの内側に対応するようにP_6（深さ60cm）、P_7（深さ52.3cm）、P_8（深さ57.8cm）の斜坑状のピットが作られており、これらのピットが有機的に結びついて入り口構造に関わっていた可能性が高い。

主柱穴はP_1（深さ65.5cm）、P_2（深さ65.2cm）が該当するものと考えられ、住居址の中央部より壁際に寄った位置に構築されている。P_2に重複が認められ、東側より西側にスライドするように立替えが行われたものであろう。P_1は褐色土（10YR4/4）、褐色土（10YR4/6）の柱痕が認められ、この層の脇に柱の根固め状の黄褐色土（10YR5/6）が認められた。

炉址は検出されていない。

表土層も含めると六層に分層でき、上層に耕作土、住居址の覆土は２層以下で、住居址の中央部に暗褐色土（10YR3/4）、この下層に３層褐色土（10YR4/4）、住居址中央部よりやや南側に寄った床面上に６層黄褐

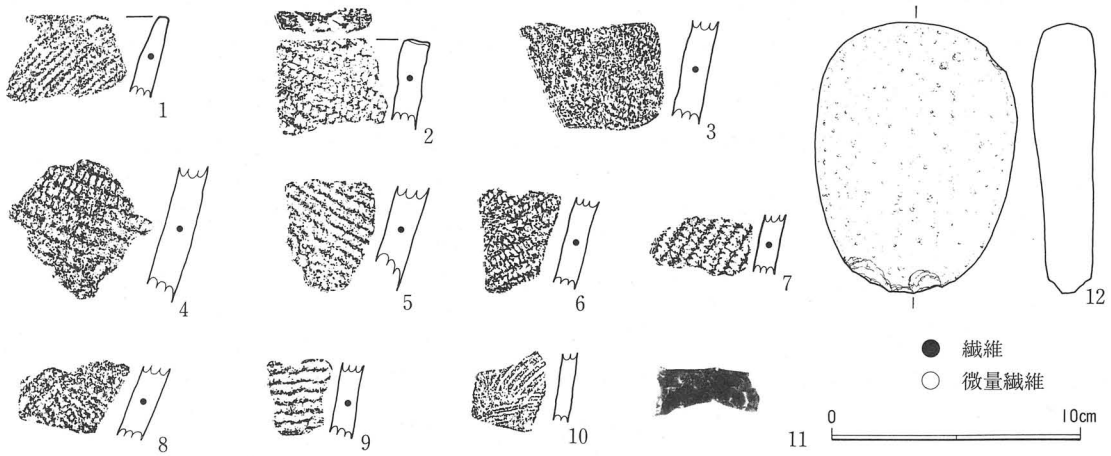


第6図　第1号住居址（1/60）

色土（10YR5/8）が堆積し締まりや粘性、内部に炭化物を含むことなどより、床面の貼り替えに関わる土層の可能性が高い。なお、この層の堆積範囲は床面がやや皿状に凹む範囲に認められる。壁際より流入したと思われる4層黒褐色土（7.5YR3/2）、5層黄褐色土（10YR5/6）が堆積する。

遺物の出土状況　出土遺物は住居址全体に散在する形を採るが、その出土傾向を巨視的に見ると、住居址の中央部に集中することがわかる。これを層位で見ると2・3層内に偏在する傾向が認められ、6層内にはほとんど見ることができない。遺物に混在する形で礫も一緒に廃棄されたような状態で検出されている。

出土遺物遺物（第7図）　出土した縄文早期末～前期初頭の土器片は、縄文施文土器群35、東海系土器群10、条痕施文土器群3、不明19で縄文施文土器群が主体を占めることに特徴を持つ。縄文施文土器群で、口縁部に貼付隆帯を持つものはなく、平縁で2のように口唇に刻みをもつものも見られる。10は櫛状工具による弧状の条線を施文するもので、東海系天神山式に比定できようか。石器では安山岩製礫器1、黒曜石製石

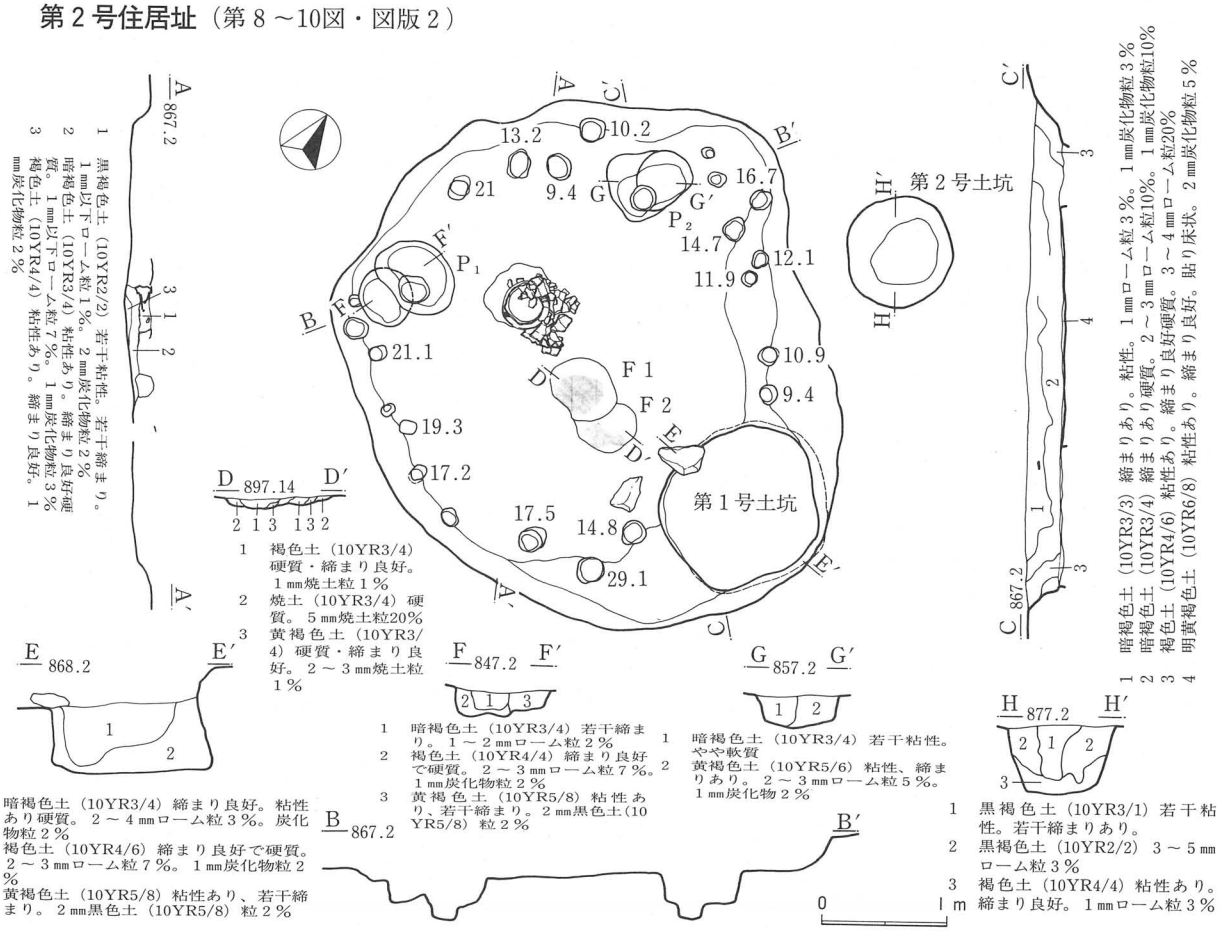


第7図　第1号住居址出土遺物（1～12は1/3、11は2/3）

鏃１、黒耀石砕片・剥片85　、チャート砕片・剥片12　が得られている。石器組成は貧弱である。

本址は検出された土器より縄文時代早期末～前期初頭に帰属すると思われる。

第２号住居址（第８～10図・図版２）



第８図　第２号住居址（1/60）

検出状況　本址は調査区の東側Ｉ－４グリッドで確認されたものである。住居址は台地の平坦な頂部より西側の谷に面した斜面上部に占地し、北東側に第２号土坑が隣接し、東側には第１号土坑が重複する。地形の関係より西側のプラン把握は難をきたしたが、明瞭に検出し得た北・東側のプラン等よりほぼ住居址の平面形プランを推定することができた。

遺構の構造　住居址の平面形プランは、やや東－西方向につぶれる不整楕円形で、規模は長軸方向である東－西で4.46ｍ、単軸の南－北で4.18ｍを測り、規模的には一般的な住居址である。

壁の立上りは西側は地形の関係より流出して掘り方が低く不明瞭であったが、北、東、南側が明瞭である。壁は地形が西側に傾斜を持つため西側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な東側で11.1㎝、北側で16.8㎝、南側で9.9㎝を測る。壁の掘り方は不明瞭で凹凸を呈する。壁の立上りは割合緩やかで断面形が皿状を呈し、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

直接地山のローム面床としており軟質な部分は認めらず、割合硬質で小さな凹凸を呈する。床面は敲き締めたような硬化した土間状の床面を確認することはできなかった。床面は中央部に向かいやや皿状の傾斜を持ち、この範囲に明黄褐色土（10YR6/6）の貼り床が認められ、貼り床内には５～８㎜大の炭化物粒子８％と、２～３㎜大の焼土粒子４％を含んでおり、拡張等の立替えに伴って床面も貼り直された可能性を考えることができようか。

第９図　第２号住居址出土遺物（１・３～18は1/3、２は1/6）

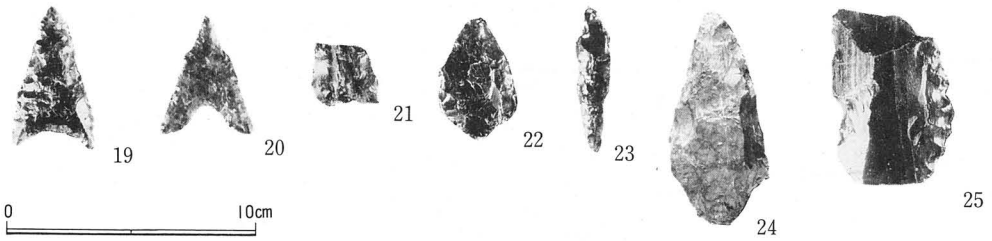
周溝は検出されてはいないが、壁際を巡る小孔が不規則な状態で壁下に検出されている。これらの小孔は浅いものが主体を占め、斜孔状となるものは少ない。

主柱穴はその位置よりP_1（深さ28cm）、P_2（深さ27.4cm）と考えられるが、P_1、P_2に重複するように直径25cm前後の柱穴が重複しており、この柱穴がその深さより主柱穴の可能性も考えられる。東側の主柱穴についてはその位置よりP_3（深さ29.1cm）と考えられ、この対辺のものについては、第１号土坑と重複していた可能性が高く、４本柱の主柱穴構造を考えることができようか。

炉址は中央より南東に寄った位置に眼鏡状の焼土範囲が検出された。この土層断面を観察すると、Ｆ１がＦ２を切った状態が観察されることより、新旧の炉址が重複したものと考えられ、炉の作り替えが行われていることが把握できた。また、焼土が環状であったことより、環内に埋設土器の設置がなされていた可能性も考えられ、炉体土器が抜き取られた可能性も考えられる。

覆土は三層に分層が可能である。住居址中央部に１層暗褐色土（10YR3/3）、２層暗褐色土（10YR3/4）が皿状に堆積し、壁際には３層褐色土（10YR4/6）が堆積する。土層の堆積状況から本址の覆土は自然堆積と考えられ、遺物２層暗褐色土（10YR3/4）中程に分布する傾向を看取ることができる。

遺物の出土状況　出土遺物は住居址中央部に集中する形を採る。その出土状態は住居址に２層が堆積している段階で、この層内に遺物が廃棄されたものと考えられ、ほとんどの遺物が床面より浮いた位置より検出されている。特に住居址中央部よりやや西側に寄った位置に検出された一括土器の廃棄は、注目すべき状態を示している。この一括土器廃棄状況は床面上に６cm前後２層が堆積した後、深鉢破片を不整長方形に敷きこの上に深鉢口縁部を逆位に置き、この中に小型深鉢を入れ子状にしている特異な状況である。これは住居址廃絶後若干の時間差の後、土器が意図的に配されて廃棄されたものと考えることができる。



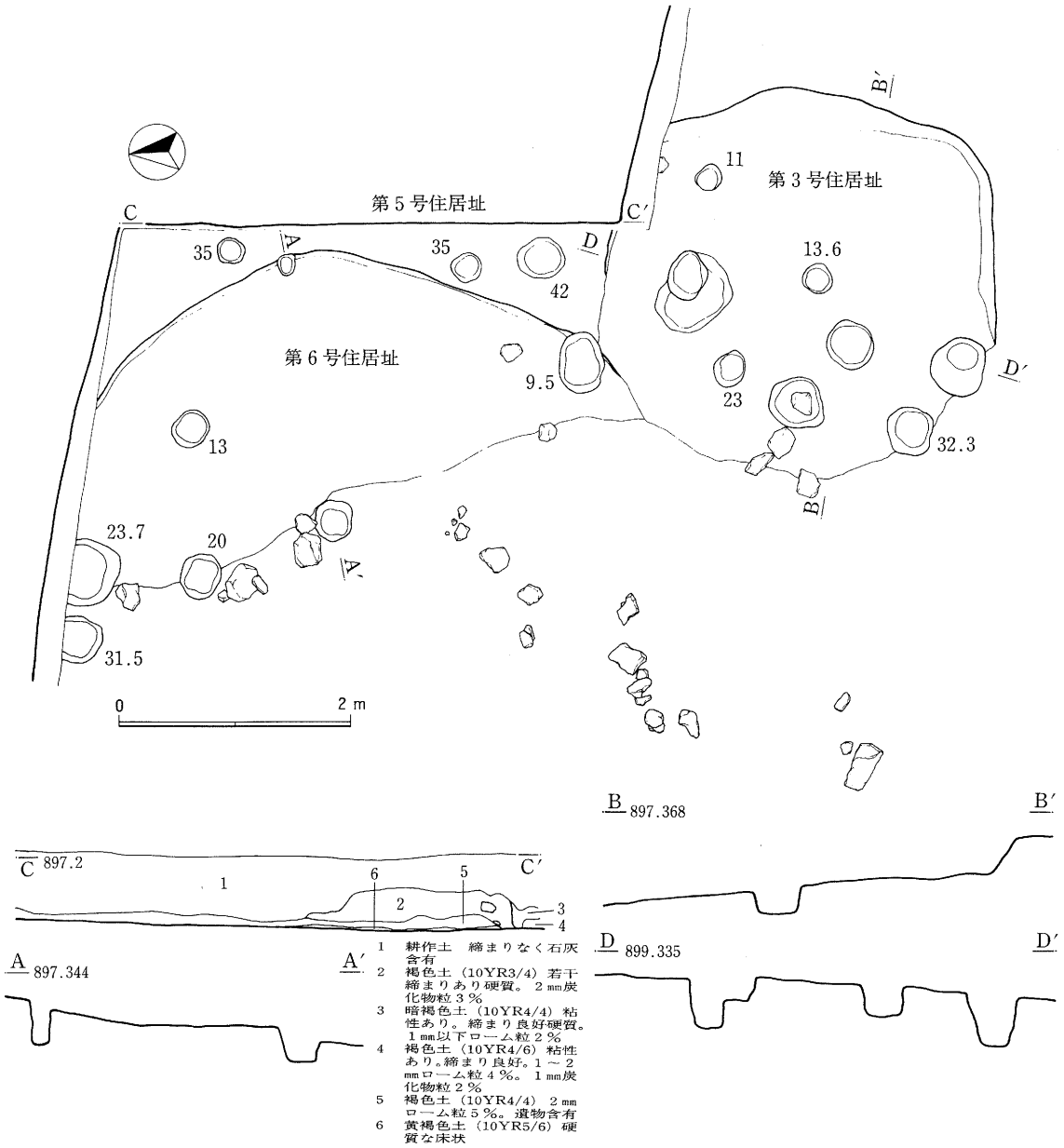
第10図　第２号住居址出土遺物（2/3）

出土遺物（第９・10図１～25）　縄文中期初頭の土器片は、5.455kg（口径19cm、器高25cm、重量1.25cmの深鉢に換算して約５個体分）が出土している。石器では打製石２、横刃型石器１、凹石８、磨石１、安山岩製剥片４、黒耀石製石鏃７、石鏃ブランク２、スクレイパー１、ピエス・エスキーユ３、黒耀石砕片・剥片等総重量809ｇ、チャート砕片・剥片12ｇが得られている。石器組成は貧弱であるが、凹石が主体を占める点に特徴を持ち、また、安山岩剥片は全て同一母岩個体と思われ、剥離法も横剥ぎである点に特徴を持つ。

本址は検出された深鉢よりみて、縄文時代中期初頭九兵尾根II式期に帰属するものと考えられる。

第３号住居址（第11・12図・図版３）

検出状況　本址は調査区の北側Ｈ－５グリッドで確認されたものである。住居址は台地の谷に面する斜面の肩部に占地し、北側に第５号住居址が重複する。土層状況の観察より本址が第５号住居址を切っていることが把握できた。また、北西側隅を第６号住居址によって切られている。地形の関係より西側のプランを把握することはできなかったが、検出し得た南・東側のプラン等よりほぼ住居址の平面形プランを推定することができた。



第11図　第3号・第5号・第6号住居址（1/60）

遺構の構造　平面プランは不整円形プランを呈するものと思われるが、地形の関係より西側が流出し全体形は判然としないが、検出された南・東側の平面形プランより見るとやや西－東方向に長軸を有する不正円形のプランを想定することができよう。遺存している範囲が少ないために規模や長軸方向については推測の域であるが、長軸3.42m×短軸3.22mを、主軸方向N－22°－Eを想定できようか。

壁の立上りは南側は地形の関係より流出して掘り方が低く不明瞭であったが、東側が明瞭である。壁は地形が西側に傾斜を持つため西側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な東側で28.3cmを測る。壁の掘り方は割合明瞭で直に近い立上りで、直線状である。

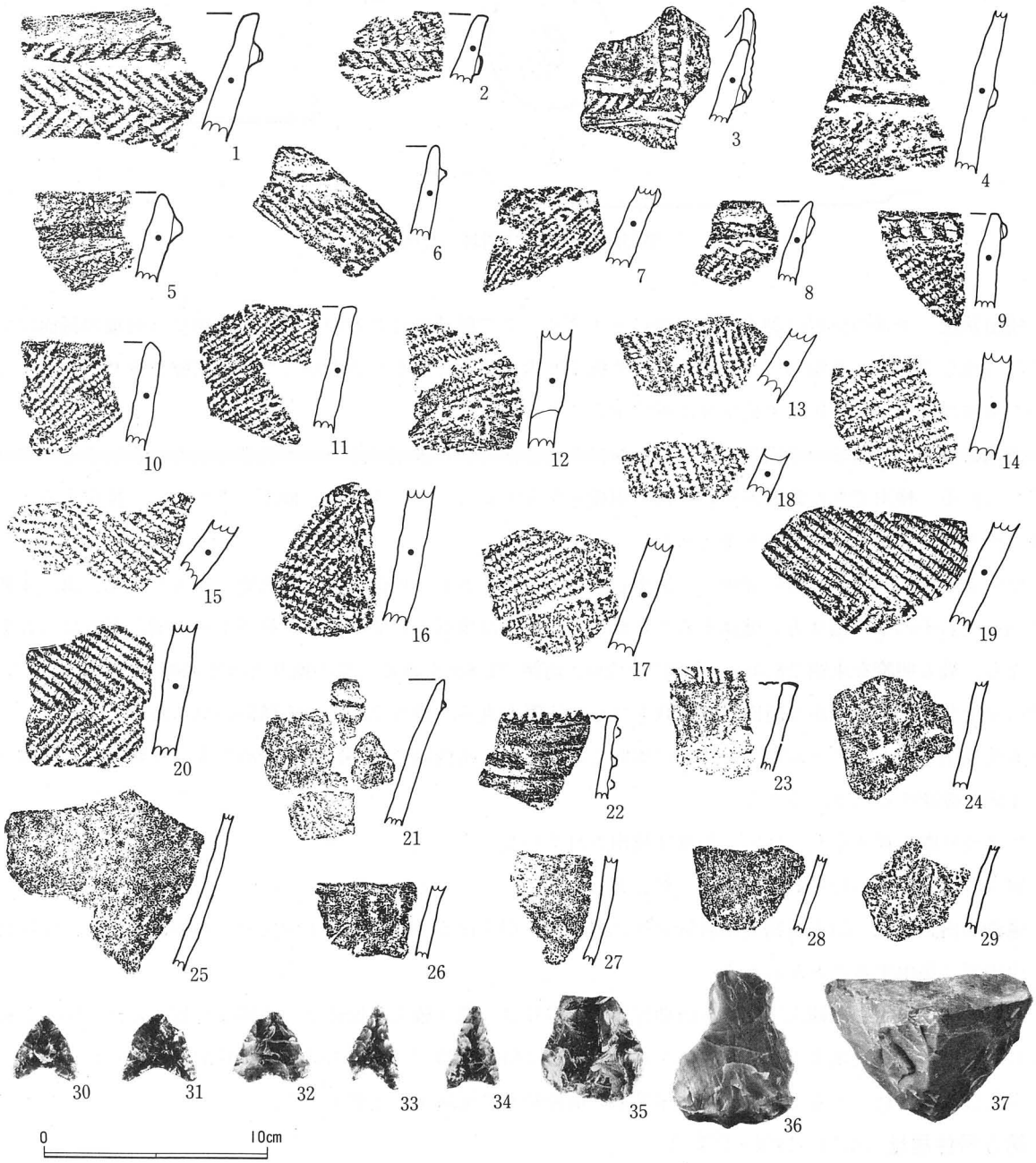
直接地山のローム面床としており全体的に割合硬質で凹凸が有、軟質な部分は認められない。床面は中央部に向かい微妙に皿状の傾斜を持つ。

周溝や壁際を巡る小孔は検出されてはいない。柱穴は北、南側に8ヶ所認められ、位置や深さ等よりP_1（深さ41cm）、P_2（深さ45.7cm）が主柱穴となるものと考えられる。炉址は検出されてはいない。

覆土は褐色土（10YR4/4）、その下層に褐色土（10YR4/6）が堆積する。褐色土（10YR4/6）の上層には径25cm前後の焼石を含む礫が散在した状態で検出されている。

遺物の出土状況　出土遺物は住居址全体に散在する形をとるが、その出土傾向を巨視的に見ると、住居址の中央部に集中することがわかる。遺物に混在する形で礫も一緒に廃棄されたような状態で検出されている。

出土遺物（第12図１～36）　出土した縄文早期末～前期初頭の土器片は、縄文施文土器群28、隆帯施文土器群１、東海系土器群８、無文土器群22、不明14を数え、縄文施文土器群が主体を占めることに特徴を持つ。１～９は口縁部に貼付隆帯を持つもので、隆帯構成や隆帯上の刻み等の施文により細分が可能と考えられる。１・２は隆帯上に絡条体、３・４は棒状工具、９は縄文原体端による刻みがなされる。21は断面形が三角形を呈し細い隆帯を持つ隆帯系で神ノ木台式に比定できよう。22～29は東海系と思われる薄手の土器群で指頭

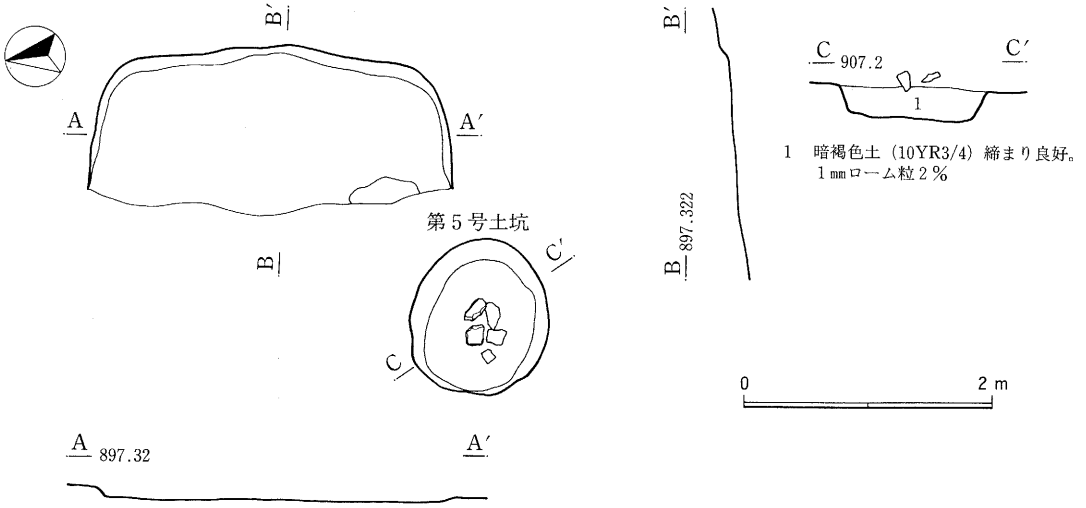


第12図　第３号住居址出土遺物（１～29は1/3、30～37は2/3）

整形痕を特徴とする。石器では黒曜石製石鏃５、石鏃ブランク１、スクレイパー２、黒耀石砕片・剥片154　が得られている。石器組成は同時期の住居址に比較しバラエティーに富んでおり、石鏃が主体を占める。

本址は検出された土器より縄文時代早期末～前期初頭に帰属すると思われる。

第４号住居址（第13図・図版３）



第13図　第４号住居址（1/60）

検出状況　本址の位置は調査区の西側Ｇ－４グリッドで確認されたものである。住居址は台地の斜面に位置に占地している。西側のプランは地形の関係より検出することができなかったが、明瞭な掘り方を有していた東側の部分より住居址の約半分を推定することができた。

遺構の構造　住居址の平面形プランは、検出された部分から推定すると、不整隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出できた範囲が狭いために規模を想定することはできない。検出できた辺より推定すると、東－西方向に長軸を持つものと考えられる。

壁の立上りは西側が地形の関係より流出しており、掘り方も全体的に低く不明瞭であった。北、南、東側について若干の壁の掘り方を確認することができた。壁は地形が西側に傾斜を持つため西側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な東側で8.4cm、北側で8.1cm、南側で2.8cmを測る。壁の掘り方は不明瞭で凹凸を呈する。壁の立上りは割合緩やかで断面形が皿状を呈し、床際が丸みを持ち立ち上がる傾向が見られる。

直接地山を床としているが、全体的に軟弱であったが、南西側の一部に敲き締めたような硬化した土間状の床面を確認することができた。

周溝や壁際を巡る小孔、柱穴、炉址は検出されていない。

覆土は黒褐色土（10YR2/2）の単一層であった。

遺物の出土状況　出土遺物は住居址全体に散在する形を採るが、その出土傾向を巨視的に見ると、住居址の中央部に集中することがわかる。

出土遺物　出土した縄文早期末～前期初頭の土器片は、縄文施文土器群２、不明２を数えるが、図示し得るものはない。縄文施文土器群が主体を占めることに特徴を持つ。黒耀石砕片・剥片34ｇが得られている。

本址は検出された土器より縄文時代早期末～前期初頭に帰属すると思われる。

第５号住居址（第11・14図・図版３）

検出状況　本址は調査区の北西側Ｈ－６グリッドで確認されたものである。住居址は台地の斜面に近い位

置に占地し、西側に第６号住居址、南側に３号住居址が重複し、床面の一部範囲が検出されたに過ぎず、

遺構の構造　本址は西・南側が他の住居址と重複し、東側が調査区外となるために住居址の全容を把握することができなかった。

直接地山のローム面床としており硬質で、水平に構築されている。

周溝や壁際を巡る小孔、炉址は検出されていない。

柱穴は３ヶ所検出されている。全体の位置関係が把握できないために、これらの柱穴が主柱穴になるものかは不明である。

覆土は第３号住居址と重複する部分に範囲に暗褐色土（10YR3/4）、その下層に褐色土（10YR4/6）が堆積する。床上には黄褐色（10YR5/6）が堆積し、この層は貼り床の可能性もある。

遺物の出土状況　本址の覆土より少量が散漫に検出されている。

第14図　第５号住居址出土遺物（１～３は1/3）

出土遺物（第14図１～３）　出土した縄文早期末～前期初頭の土器片は、縄文施文土器群３、黒耀石砕片・剝片７ｇが得られている。

本址は検出された土器より縄文時代早期末～前期初頭に帰属すると思われる。

第６号住居址（第11・15図・図版３）

検出状況　本址は調査区の北側Ｈ－６グリッドで確認されたものである。住居址は台地の谷に面する斜面の肩部に占地し、東側に第５号住居址が、南東側に第３号住居址が重複する。土層状況の観察より本址が第５号・第３号住居址を切っていることが把握できた。地形の関係より西側のプランを把握することはできなかったが、検出し得た東側のプラン等よりほぼ住居址の平面形プランを推定することができた。

遺構の構造　平面プランは不整円形プランを呈するものと思われるが、地形の関係より西側が流出し全体形は判然としないが、検出された東側の平面形プランより見るとやや南－北方向に長軸を有する不整円形のプランを想定することができよう。遺存している範囲が少ないために規模や長軸方向については不明である。

壁の立上りは東側に不明瞭なものが検出されている。壁は地形が西側に傾斜を持つため西側に至るにつれ低くなる。最も明瞭な東側で６㎝を測る。壁の掘り方は割合明瞭で直に近い立上りで、直線状である。

直接地山のローム面床としており全体的に割合硬質で凹凸が有、軟質な部分は認められない。床面は西側に緩やか傾斜を持つ。なお、床内の一部に地山の小礫が突出部分が認められる。

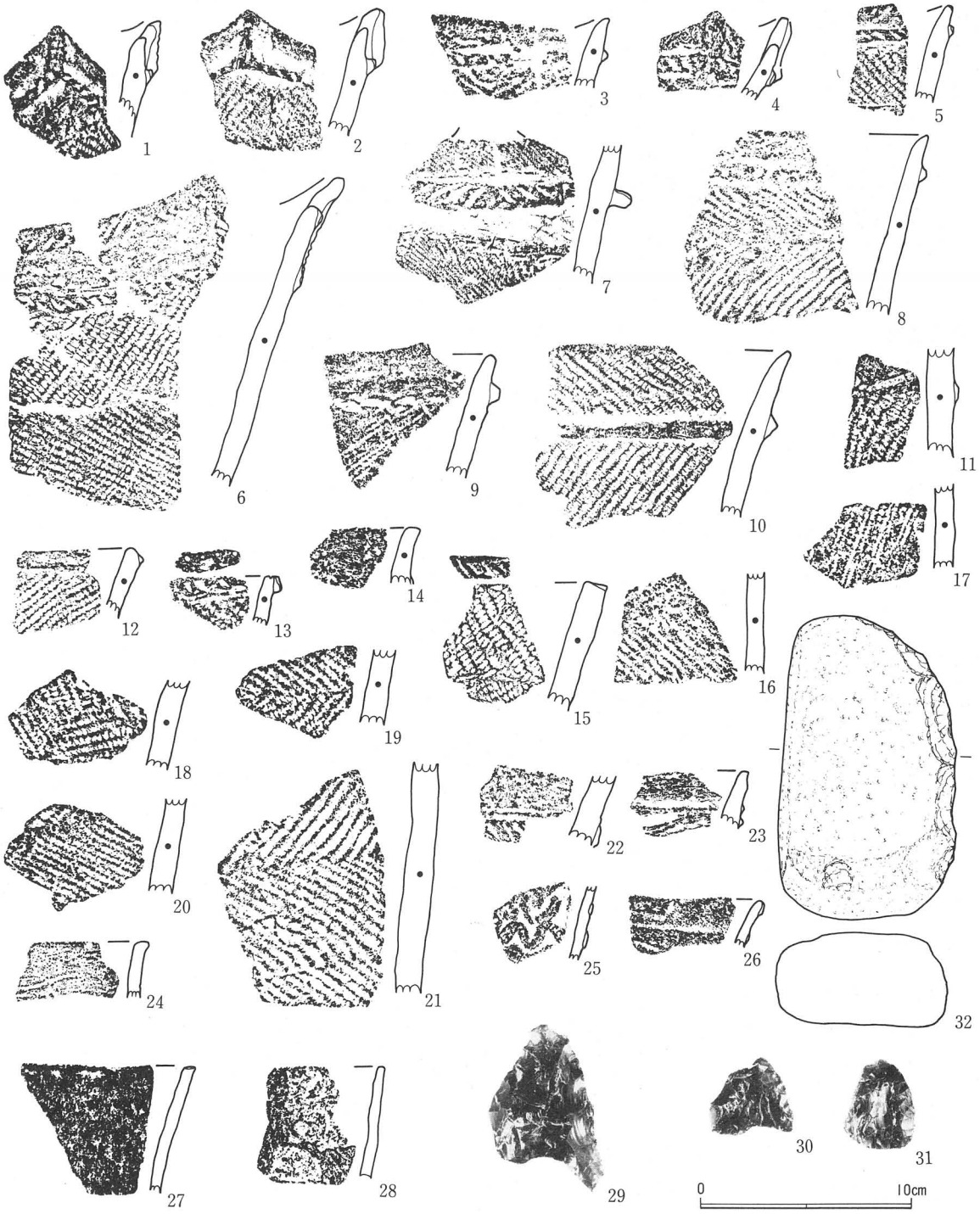
周溝や壁際を巡る小孔は検出されてはいない。柱穴は散在する形で６ヶ所認められるが、位置や深さ等より主柱穴を推定するはできなかった。炉址は検出されてはいない。

遺物の出土状況　出土遺物は住居址全体に散在する形を採るが、その出土傾向を巨視的に見ると、住居址の中央部に集中することがわかる。遺物に混在する形で礫も一緒に廃棄されたような状態で検出されている。

出土遺物（第15図１～32）　出土した縄文早期末～前期初頭の土器片は、縄文施文土器群30、隆帯施文土器群２、沈線文系土器群１、東海系土器群５、条痕文系土器群１、不明27を数え、縄文施文土器群が主体を占めることに特徴を持つ。１～14は口縁部に貼付隆帯を持つもので、隆帯構成や隆帯上の刻み等の施文により細分が可能と考えられる。１・２・４・６は小波状口縁を呈し、この波頂部から隆帯が垂下し、口縁部に

巡るものが特徴的な隆帯構成である。１～７は隆帯上に棒状工具による刻みがなされる。23は断面形が三角形を呈する細い隆帯を持つ隆帯系で神ノ木台式に比定できよう。24は細い蛇行沈線が施文されている。25～28は東海系と思われる薄手の土器群で指頭整形痕を特徴とする。25は蛇行隆帯が貼付され、隆帯上には貝殻背圧痕が施文され木島Ⅱ式に比定できよう。石器では黒曜石製石鏃３、石鏃ブランク３、ピエス・エスキーユ２、黒耀石砕片・剥片286ｇ、安山岩製磨石１が得られている。石器組成は同時期の住居址と大差ない。

本址は検出された土器より縄文時代早期末～前期初頭に帰属すると思われる。



第15図　第６号住居址出土遺物（１～28・32は1/3、29～31は2/3）

2．縄文時代早期末～前期初頭の遺構の構成

今回の調査により検出された住居址は一定の配置が認められず、３軒の住居址が重複するなど、一定の時間幅の中で数回に亘る変化があったことを捉えることができた。

竪穴住居址の構造について　今回調査された縄文時代早期末～前期初頭の竪穴住居址でその平面形等の規模や、竪穴住居址内の施設が完全で明確に把握できたものはない。しかし、全体の約1/2が把握できたものは、第１号・第３号・第６号住居址の３軒に過ぎず、この３軒を持って本遺跡の竪穴住居址について考えることはやや独善的ではあるが、敢えて概観してみる。

竪穴住居址の平面プランは第３号住居址を除いて全てが、不整円形を呈している。第３号住居址は東壁がやや丸く張るものの、東南側壁の張り方より隅丸方形と考えられ、不整円形と隅丸方形の両者が存在することが把握できた。当該期の住居址は、円形と方形のものが混在する傾向を示すことが指摘されており、本遺跡の場合も同様な傾向を示していると言うことができる。検出された竪穴住居址の第１号・第３号住居址間の面積は大きな相違は認められなかったが、第６号住居址はこれらとは異なり、大型のグループとして捉えられるものであり、一般的な規模と大型のものが混在するあり方を示している。

当該期の住居址では炉を持たないものと、地床炉を持つものの両者が認められているようであるが、当遺跡においては全ての住居址に炉は検出されてはいない。

柱穴・周溝については、第１号住居址で最も整った形の主柱穴配置と、深く明瞭な周溝が認められた点に特徴的で、当該期のあり方として第３号・第６号住居址のような不規則な柱穴配列と、周溝を持たない構造が一般的であるのに対して、第１号住居址のあり方は特異なあり方として捉えることができようか。

床面は第１号・第３号・第６号住居址共に割合硬質な床面であったが、特に第１号住居址は一部に叩き締めたような土間状の範囲が確認されている。床の構造は住居址中央部に皿状に傾斜する傾向のものが主体をなす。

竪穴住居址の重複関係について　今回の調査により検出された竪穴住居址は、大まかに概観すると縄文時代早期末から前期初頭のある程度まとまった時間枠内に収まるものである。竪穴住居址間で重複関係を有しているものや、近接した位置関係を有するものが認められ、若干の時間差の中で竪穴住居址が構築されたことが窺える。重複関係を整理すると、古第５号住居址（切る）第３号住居址（切る）第６号住居址新と整理でき、大きく３段階の時間幅を想定することができる。

住居址の位置関係とその配列について　今回調査された竪穴住居址は重複関係を有しているものと、単独であるもの認められるが、これらの住居址の台地内の位置関係を概観してみると一定の傾向を示していることがわかる。

調査が遺跡範囲の西側範囲に限定されていたために、住居址配置の全容の把握には至ってはいないが、調査し得た範囲だけでその傾向を推定すると、住居址は西側谷部に面した斜面の頂部の、等高線に沿った形で展開する傾向が窺え、台地中央部を囲むように住居址が展開する可能性が高い。また、住居址配列等を考慮すると、集落は西側の入り組み谷をかなり意識しているものと考えられ、この谷が集落の限界であった可能性が高い。

住居址の台地内における展開のしかたを概観すると、本遺跡の縄文時代早期末から前期初頭の集落の全体規模は不明であるが、第３号・第５号・第６号住居址の著しい重複から考えると、かなりの頻度でこの地が集落として利用されていたものと考えることができよう。また、他の幅広い時期の遺物も検出されていることから、この集落は継続性の高い集落であると言えよう。

第２節　縄文時代・平安時代・近世・近代の遺物

１．縄文時代の遺物の概要

今回の調査により遺構外から得られた縄文時代の遺物は、早期後半・早期末～前期初頭・前期末・中期前半・中期後半の土器片、黒耀石製石鏃、石鏃未製品、ドリル、スクレイパー、安山岩製の磨石、凹石等が検出されている。この内で特徴的なものを抽出し掲載した。

縄文時代早期後半条痕文系土器群（第16図１～５・８～10）　１・２は押引沈線と内面を条痕整形を行う鵜ヶ島台式のもの。３～５は地文が擦痕状の条痕で、この上に半割竹管状工具による沈線が施文され、口唇部に半割竹管状工具端による刻みがなされる。判ノ木山遺跡第４類に帰属するものであろう。８～10は器表に擦痕状の条痕が施文されている。

縄文時代早期末から前期初頭含繊維縄文施文系土器群（第16図11～24）　本遺跡で中心をなす土器群である。11～18・23その口縁部である。11・12は小波状波頂部より垂下する逆Ｔ字形貼付隆帯を持つ。13～18・23は口縁部下にタガ状の貼付隆帯を持つ。隆帯の状態が明瞭なもの（11～16）、不明瞭なもの（17・18・23）の両者が認められ、隆帯上に棒状の工具で刻みを有するもの（11・13・14）、縄文が施文されるもの（17・18）隆帯脇に篦状工具による刻みがあるもの（23）が認められる。同部破片は縄文が斜状構成や菱形構成となる。24は縄文施文ではないが、撚糸文ＲとＬの２本揃えが施文されている。

縄文時代早期末から前期初頭隆帯系土器群（第16図25・26）　25は低い不明瞭な隆帯を持ち、この上に篦状工具による刻みがなされる。26は断面三角形の細い隆帯で、隆帯上は鋭利な篦状工具による刻みがなされている。地文は擦痕状の不明瞭な条痕が認められる。神ノ木台式に帰属するものか。

縄文時代早期末から前期初頭東海系土器群（第16図27～29）　薄手で指頭圧による整形痕を残す一群である。27は爪形が、28は口唇部に貝殻腹縁文、29には刻みがなされている。

縄文時代早期末から前期初頭の土器群の構成　本遺跡で得られた早期末から前期初頭の土器群のあり方を見ると、早期末の土器群は、１～10が該当するようで、ある程度の時間幅を有していることが判明した。大雑把に見ると、早期末は末葉の条痕文系等と、早期最終末から前期初頭の縄文系、東海系に別離しそうで、絡条体系土器群が検出されていないことに特徴を持ち、ある程度の断続を認めることができる。

縄文前期末から中期後半の土器群　全て遺構に伴う資料でなく量的には少ない。前期末は縄文地文に結節浮線が貼付される土器、中期初頭三角陰刻文土器、中期前半新道式、藤内Ⅱ式、中期後半曽利Ⅳ・Ⅴ式の土器片が得られ、幅広い時期の資料が得られているが、割合継続せず断続的となる点に特徴を持つ。

２．平安時代の遺物の概要

土師器坏底部片が１点検出されている。表採資料であるためにその帰属遺構等については不明であるが、この地が平安時代に利用さていたことを示している。

土師器坏　図示はできなかったが、土師器底部破片が１点検出されている。回転糸切り処理のなされるもので、体部は割合急角度で立ち上がる器形を呈している。焼成は良好である。全体像が把握できないために時期等は不明であるが、強いて得られた情報より考えると、平安時代でも古い段階に帰属するものと考えることができよう。

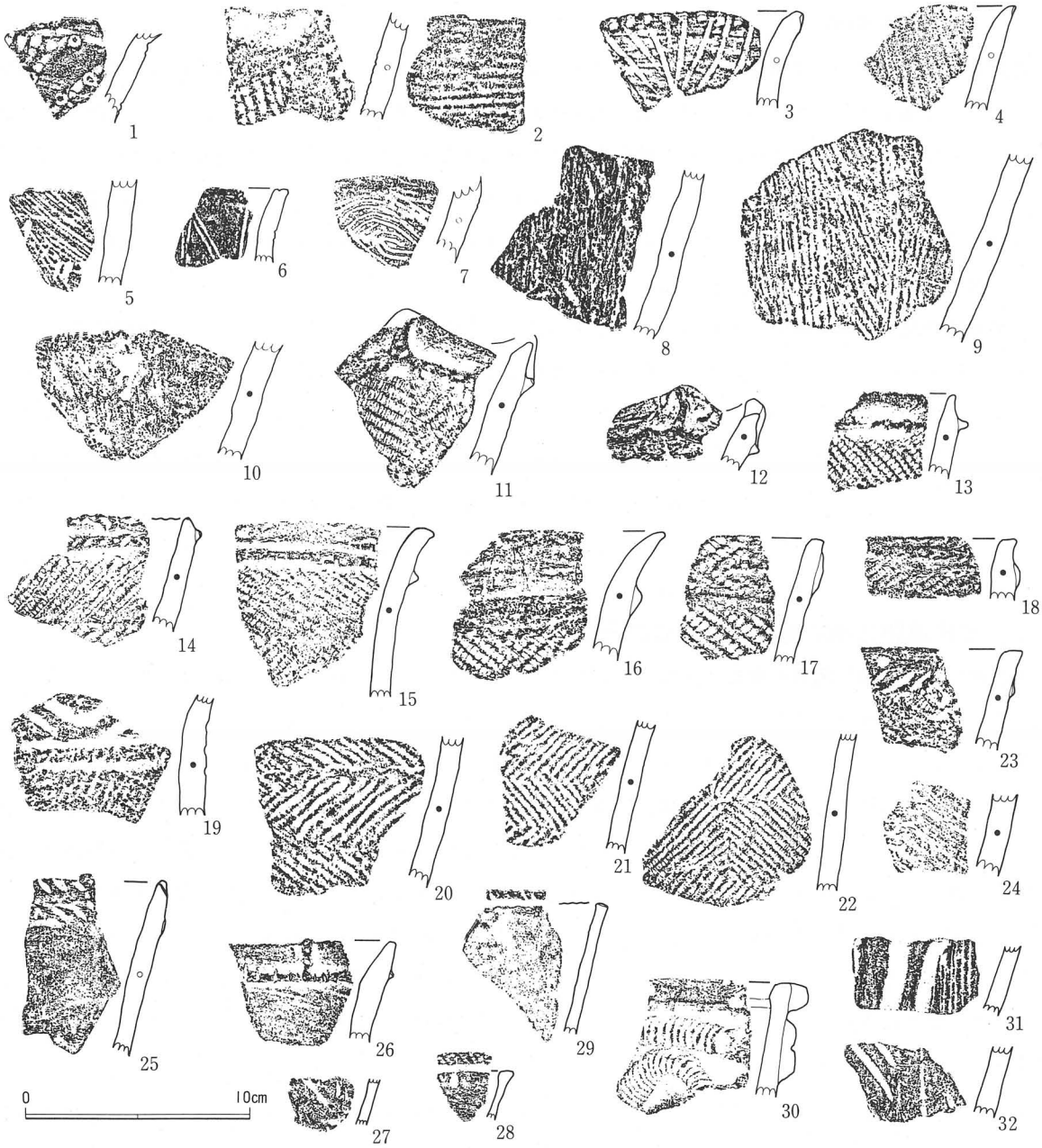
３．近世・近代の遺物の概要

近世に帰属すると思われる陶器片が４点、近代帰属すると思われるものが７点検出されている。これらの資料は本遺跡内の遺構に直接関わるものではなく、また、近世・近代にこの地が居住域等として利用された

ために遺物が遺存するのではなく、出土状況より全て耕作等により堆肥等に交ざって他から入り込んだ塵芥と考えられるが、この地が耕地として利用されていた時期の幅を示す重要な資料である。検出された陶器片は全て本業焼以降に属し、時期的には18世紀後半以降に帰属させることができる。

近世・近代の陶磁器　図示し得たものはないが、灰釉丸碗・染付丸碗・銅緑釉瓶掛・灰釉小瓶が得られている。量的には多くなく器種的にも大きな傾向を見出すことはできない。市域の遺跡の例等と比較すると、肥前系磁器が見られない点に特徴がある。

近代陶磁器では印判染付磁器碗・皿、灰釉練鉢が得られているが、全て20世紀初頭に帰属するものである。



第16図　遺構外出土の縄文土器（1/3）

第Ⅴ章　調査の成果と課題

第１節　買地遺跡出土縄文時代早期末から前期初頭の土器群について

今回の調査により５軒の縄文時代早期末から前期初頭の竪穴住居址が検出された。これらの竪穴住居址の一部は重複関係を有し、若干の時間差を有していることが判明している。そこで、これらの住居址からの土器群の構成差を若干整理し、また、近年該期の良好な資料が発表され、「中道式」(文献７)「塚田式」(文献８)の提唱がなされ、整理が進みつつある。これらの成果を含めて該期の土器の様相を再検討してみたい。

１．買地遺跡遺構内の土器群の構成

地文分類によるグループ構成について　今回住居址内から検出された土器、特に縄文時代早期末から前期初頭について地文より分類すると、縄文系、撚糸文系、無文系（薄手指頭圧痕系）が認められ、縄文が主体をなす。これらについて縄文構成は斜状構成と、菱形構成となるものがあり、斜状構成が主体を占める。これらの地文に縄文施文のなされるものは、胎土中に割合多量の繊維を含有している。他の該期の遺跡と比較するとこの構成は大差はないが、撚糸文系の量が希少である点に特徴を持つ。本遺跡における該期の主体をなす土器は含繊維縄文施文土器(註．３)と考えることができる。

含繊維縄文施文土器の特徴　本群の土器は地文等には大きな特徴は有してはいないが、口縁部に貼付される隆帯に特徴を持つ。この貼付隆帯は本群の大きな特徴と考えられ、この群に類似する肥厚口縁・垂下肥厚部を持つ特徴的な一群について、「中道式」の型式設定が行われその位置付けがなされ、また、隆帯の特徴を捉えその類型と、東海系土器群との伴出関係より段階的な変遷が考えられ、タガ状貼付隆帯から肥厚口縁への方向性が導きだされる(文献９)(文献10)。タガ状貼付隆帯の一群について他伴出遺物や口縁部文様帯のありかたから、「塚田式」の提唱がなされ、前期最初頭に位置付けがなされている。今回本遺跡から得られた資料も、これらに帰属するものであり、貼付隆帯の構成に着目し分類を行いたい。

２．買地遺跡含繊維縄文施文土器の分類

本遺跡における貼付隆帯の構成と分類　本遺跡において検出された含繊維縄文施文土器群の隆帯の状態、隆帯構成、隆帯上施文により、下記のように分類が可能であろう。

第Ⅰ群－口縁部下に割合高い明瞭な貼付隆帯をもつ一群で、隆帯構成により４類型に分類が可能である。平縁でタガ状貼付隆帯をもつもの－１類、小波状口縁（小突起）で波頂部からの垂下隆帯と口縁部下に巡る隆帯が繋がり、逆Ｔ字形構成となるもの－２Ａ類、大きな波状口縁で波頂部からの垂下隆帯と口縁部下に巡る隆帯が繋がり、錨形構成となるもの－２Ｂ類、波状口縁となり口縁部下にタガ状貼付隆帯をもつもの－２Ｃ類が認められる。隆帯上施文は絡条体圧痕が斜状に刻まれるもの－ア種、棒状工具による割合太い斜状の沈線が刻まれるもの－イ種、縄文端を刻み状に刺突するもの－ウ種、隆帯に刻みをなさないもの－エ種が認められる。隆帯構成的には４類型に分類がなされているが、１類の一部は２Ａ類の一部も含んでいる可能性もある。

第Ⅱ群－口縁部下に不明瞭で低い貼付隆帯をもつ一群。隆帯構成は１類となり、篦状工具による斜状刻みがなされるもの－オ種、隆帯上に縄文施文が認められるもの－カ種が認められ、第Ⅰ群とは隆帯上の施文方法に異なりが認められる。

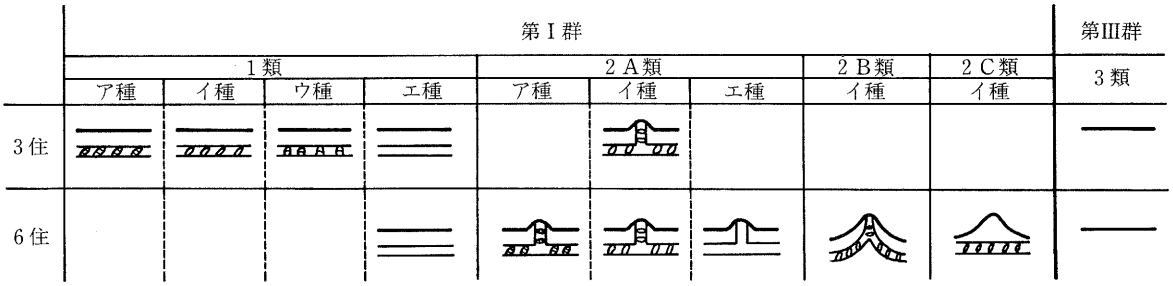
第Ⅲ群－貼付隆帯を持たないもので、平縁だけのもの－３類、平縁で口唇に篦状工具による斜状の刻みが

なされるもの－オ種が認められる。

3．買地遺跡における含繊維縄文施文土器の変遷

含繊維縄文施文土器出土住居址の整理と出土土器の構成　本遺跡において含繊維縄文施文土器が検出されている住居址は、第1号・第3号・第5号・第6号住居址である。これらの住居址で重複関係等で新旧の把握ができているものは、第3号・第6号住居址の関係で、第3号住居址を切り第6号住居址が構築されていることより、旧第3号、新第6号と捉えることができる。

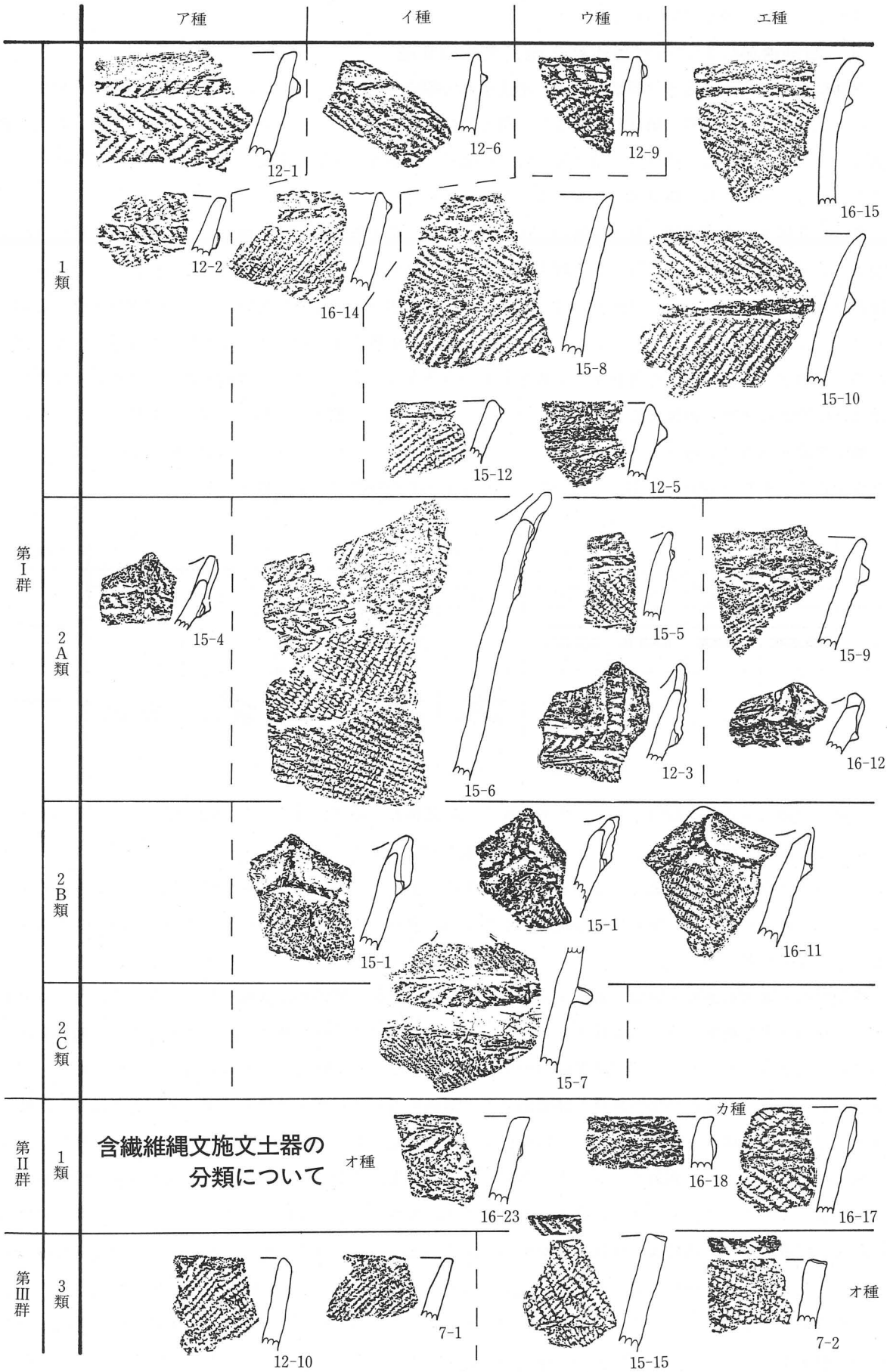
第3号住居址の含繊維縄文施文土器の口縁部の様相は、第Ⅰ群1類ア～エ種、2A類イ種、第Ⅲ群3類が認められる。第6号住居址では、第Ⅰ群1類エ種、2A類ア種、イ種、エ種、2B類イ種、2C類イ種、第Ⅲ群3類が認められる。この状態から考えると、第1号住居址と第3号住居址で大きな差異は1類、2類のバリエーションに認めることができる。第3号住居址では平縁の1類が主体をなすが、第6号住居址では口縁部が小波状2A類、大きな波状を呈する2B類が主体をなす点で、この文様構成差を住居址の重複関係を踏まえ時間的な差異と単純に捉えることもできようが、1類の一部は2A類の一部とも見做すこともでき、一概に平縁から波状口縁へとの図式を描くことは難しいと考えられる。しかし、第3号住居址には大きな波状を呈する2B類は認められず、この一群は第6号住居址を特徴付ける一群と考えることができよう。



第17図　第3号・第6号住居址口縁部文様構成

詳細に口縁部下隆帯を観察すると、隆帯上施文と隆帯整形、隆帯断面のミクロ的な部分について両住居の土器群には差異を認めることができよう。隆帯上施文では、両住居址ではア・イ・エ種が認められるが、第3号住居址はウ種の特異な施文を認めることができる。また、量的に施文法を比較すると、第3号住居址ではア種がイ種よりも多く、第6号住居址ではこの状況が逆転する傾向がみられる。この差も時間的な変化と捉えることが可能であろうか。

隆帯整形と隆帯断面形を詳細に観察すると、貼付隆帯の整形と断面形は密接な関係を有しており、隆帯脇をナデ整形せず断面形がカマボコ状となるもの－①、隆帯脇にナデ整形を加え隆帯を密着させ、断面形が丸みをもつ台形状となるもの－②、隆帯脇のナデ整形が強くなされ、断面形が丸みを持つ三角形となるもの－③が認められる。これらの隆帯形状と隆帯施文との関係をみると隆帯①はア・イ種、隆帯②ではイ～エ種が、隆帯③ではイ・エ種が認められる。この結果に基づき施文法を考えると、隆帯①施文ア種は貼付隆帯上を絡状体を押圧することで、密着しようとする意図が窺え、隆帯②施文イ種は隆帯上を棒状工具を用いた幅広の刻みを施文するもので、その効果は絡条体を棒状工具に置換したような様相となる。このような貼付隆帯の剝落防止措置としての絡条体・棒状工具を用いた幅広の沈線による隆帯上施文による隆帯の押圧処理は、貼付隆帯の脇を強いナデ整形することで解消しようとする方向となり、これは隆帯の断面形に反映し隆帯③が成立するものと考えることができよう。隆帯③の施文にみられるイ種は絡条体・棒状工具を用いた幅広沈線押圧を継承するものの、単に加飾的な付加文へと変化していくように看取ることがで、隆帯のあり方は①ア


ア種
イ種
ウ種
エ種
第Ⅰ群
1類
2A類
2B類
2C類
第Ⅱ群
1類
第Ⅲ群
3類
12-1
12-6
12-9
16-15
12-2
16-14
15-8
15-10
15-12
12-5
15-4
15-5
15-9
15-6
12-3
16-12
15-1
15-1
16-11
15-7
含繊維縄文施文土器の
分類について
オ種
カ種
16-18
16-23
16-17
オ種
12-10
7-1
15-15
7-2

種→①イ種→②イ種→③イ種の変遷を考えることができよう。

このような隆帯施文と隆帯断面の構成差を第3号・第6号住居址で考えてみると、第3号住居址では①ア種、①イ種が主体となり、第6号住居址では②イ種、③イ種が主体となる点を考えると、隆帯整形、断面形、施文との関連よりの新旧の方向性を考えると、貼付されただけの隆帯からナデ整形が加えられた隆帯への方向性を見出すことができ、また、隆帯上への施文についても、幅広の斜状沈線による押圧から形骸的な刻みへの変化、施文工具でみると絡状体→棒状工具→箆状工具の方向性を見出すことができよう。

含繊維縄文施文土器群の変遷　前項に新旧関係を有する第3号住居址、第6号住居址遺物の構成の状況を把握してきた。それによると、隆帯のあり方と隆帯上施文には密接な関連があり、時間的変遷をするものと捉えられた。整理すると第1段階口縁部形態が平口縁、小波状（小突起）口縁で、隆帯構成は横位一条（1類)、逆T字形（2A類）となり、貼付隆帯は脇のナデ整形をあまりせず、隆帯上施文は絡条体・棒状工具を用いた幅広の斜状押圧がなされる群。第2群口縁形態が平口縁、小波状（小突起）口縁、大きな波状口縁で隆帯構成は前段階を踏襲するが、新たに錨状（2B類）が加わる。貼付隆帯は脇のナデ整形が明確化し、この整形が隆帯の断面形に強く影響を与えている。隆帯上施文は文様構成は踏襲するものの、施文具の置換がなされ、第1段階では隆帯の剝落防止の意味の強かった押圧的な斜状刻みが形骸化し、単に装飾的なものへと変化する群。住居址内から得られた情報ではないが、隆帯変化から考えると第2段階に続き第II群不明瞭な貼付隆帯群へと変化する可能性が示唆できる。貼付隆帯を絡条体・棒状工具による押圧処理から貼付隆帯脇へのナデ整形処理の強化、貼付隆帯全体へのナデ押さえによる低隆帯化の方向性を見出すことができよう。これは以前示した貼付隆帯から低隆帯への方向性を裏付けた形となり、貼付隆帯の変化は、含繊維縄文施文土器の変遷観の基礎となるようである。

含繊維縄文施文土器群の時間的位置付け　今回得られた本群独自でその位置を明確にし得ている部分は少ない。1994年御代田町塚田遺跡の資料を基礎に本群に分類される土器の内容の整理及び位置付けがなされ、「塚田式」の提唱がなされている。この型式設定に準拠すると、第I群1類イ・エ種、2A類イ・エ種、2C類イ種が「塚田式」に相当しようが、「塚田式」には貼付隆帯上に絡条体による刻みを施す群（第I群1類ア種、2A類ア種）は含まれてはおらず、この群は前項に記した施文の流れを考慮すると、「塚田式」よりも古い段階に属する可能性が強く、第3号住居址と第6号住居址の重複関係を重視すると、第I群1類ア種、2A類ア種→「塚田式」の図式を設定することが可能であろう。

「塚田式」は隆帯構成、口縁部隆帯間に下吉井式類似の波状沈線文が施される点、撚糸側面圧痕施文のあり方より前期初頭に位置付けがなされている。今回得られた資料の口縁間施文に注目すると、第12図5（撚糸鋸歯状施文)、第12図2、第15図7・10の縄文施文が認められるだけで、大きな時期を位置付けるような施文はなされてはいない。そこで関東系・東海系土器群との共伴関係でみると、第3号住居址では神ノ木台式（第12図21）を、第6号住居址では神ノ木台式（第15図23)、木島II式（第15図25)、下吉井式（第15図24）が検出されており、この関東系・東海系土器群の構成差を考えると、第3号住居址は早期終末、第6号住居址は早期終末から前期最初頭に位置付けることが可能であろう。このことは住居址の重複関係、含繊維縄文施文土器の文様変遷とも齟齬しない結果であり、今回得られた資料は縄文時代早期終末から前期最初頭に位置付けることができよう。

含繊維縄文施文土器群の変遷について塚田式（文献8）第1群→塚田式第2群→中道式の変遷が考えられている。今回得られた方向性もこの流れに同調する部分もあるが、隆帯上施文のあり方を考慮すると、その一部は「塚田式」の範疇には入らないものが見受けられる。特に絡条体を隆帯上に施文するものは「塚田式」には含ま

れておらず、この群は「塚田式」の前段に位置付けが可能であろう。

貼付隆帯縄文施文土器群の出自について「塚田式」設定において、関東地方隆帯文系土器との関係を視野に入れた位置付けがなされ、なお且つ信州の在地的な土器と考えられる絡条体圧痕文系からの系譜の二通りが考えられている。実際「塚田式第１群」に見られる隆帯構成や隆帯整形は、関東地方隆帯文系よりの影響を窺える部分を有している。しかし、貼付隆帯縄文施文土器群の主体的な流れは絡条体施文土器群内に見いだすことができ、隆帯上に絡条体圧痕の施文される群を「塚田式第１群」の前段に挿入することで隆帯変化についてより理解することができよう。

整理すると買地遺跡第Ｉ群１類ア種、２Ａ類ア種→「塚田式第１群」を考えることができ、中沢氏(文献11)が示した方向性である梨久保遺跡23号住居・75号住居出土資料、「塚田式」の一部への変遷観と共通し、「塚田式」は含繊維縄文施文土器群の系譜の中の一段階と捉えることが適当であり、その母体を絡条体圧痕文系に求めることができよう。

大雑把に含繊維縄文施文土器群について、その貼付隆帯に着目し段階設定を行った。今後絡条体圧痕文系土器群の変遷整理の中で、貼付隆帯含繊維縄文施文土器群の出自や貼付隆帯の変遷をつかむことができよう。今回買地遺跡で得られた情報は縄文時代早期最終末から前期最初頭の土器の様相を考える上で貴重な所見を与えてくれたが、その半面今後これらの情報を踏まえ解決していかなければならない問題を生んでいる。今後稿を改め検討していきたい。

（註・参考文献）

（文献１）1973　米沢考古学クラブ　『古道－霧ケ峰南部における先史時代の黒曜石運搬ルートと考えられる古道の調査－』

（文献２）1961　宮坂英弐　「縄文早期終末の住居址－茅野市駒形遺跡出土－」『信濃』　13-8　信濃史学会

（文献３）1966　宮坂英弐　「長野県茅野市駒形遺跡」『日本考古学年報』14　日本考古学会

（文献４）1997　長野県教育委員会　「農業基盤整備事業に係る茅野市、原村内の分布調査」『大規模開発事業地内遺跡－遺跡詳細分布調査報告書－』

（註．１）平成11年度調査結果による。

（註．２）平成11年度調査結果による。

（文献５）1999　守矢昌文　『向林遺跡』　茅野市教育委員会

（文献６）1948　宮坂英弐　『原住民族の遺蹟－八ケ嶽尖石の研究－』

（文献７）1984　児玉卓文　「結語」『長門町中道』　長門町教育委員会

（文献８）1994　下平博行　「「塚田式」の設定とその様相について」『塚田遺跡』　御代田町教育委員会

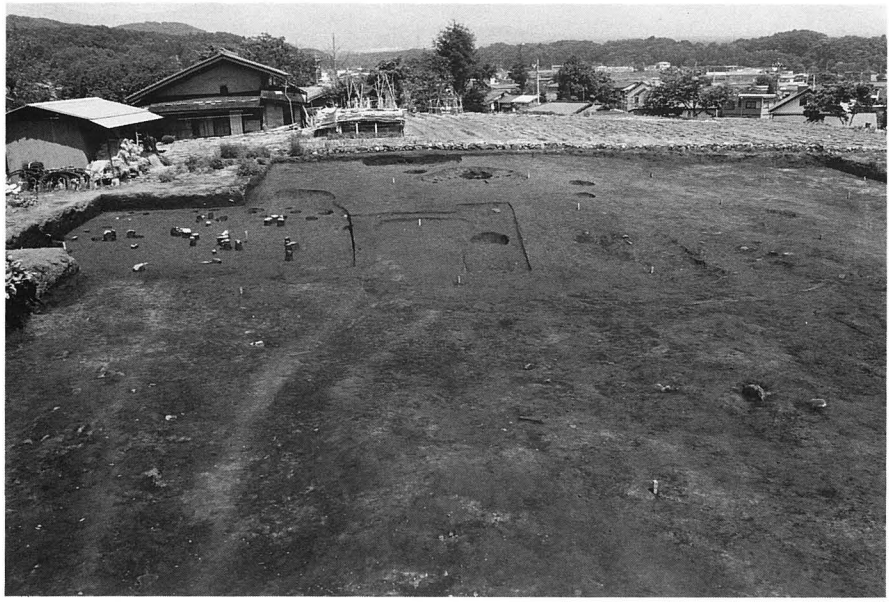
（註．３）今回含繊維縄文施文土器と一括した群は、所謂縄文施文尖底土器群を指すが、今回は底部の検出がないため一応含繊維縄文施文土器としておく。

（文献９）1989　守矢昌文　「長野県内における縄文時代早期末から前期初頭の土器群について－高風呂遺跡出土の縄文施文系の土器を中心として－」　『会報３』　諏訪考古学研究会

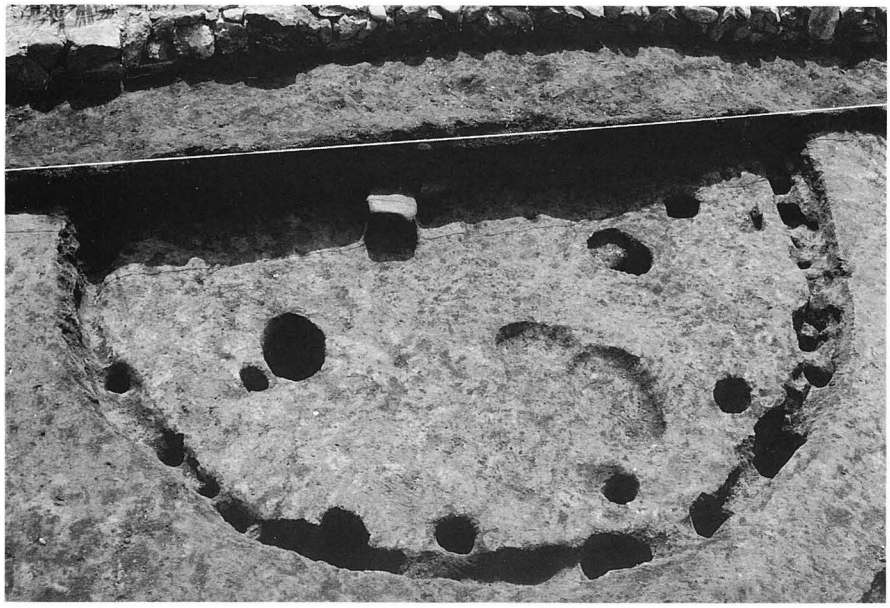
（文献10）1990　守矢昌文　「芥沢遺跡出土の縄文時代早期末から前期初頭の土器群について」『芥沢遺跡』　茅野市教育委員会

（文献11）1994　中沢道彦　「塚田遺跡出土早期土器群について」『塚田遺跡』　御代田町教育委員会

図　　版



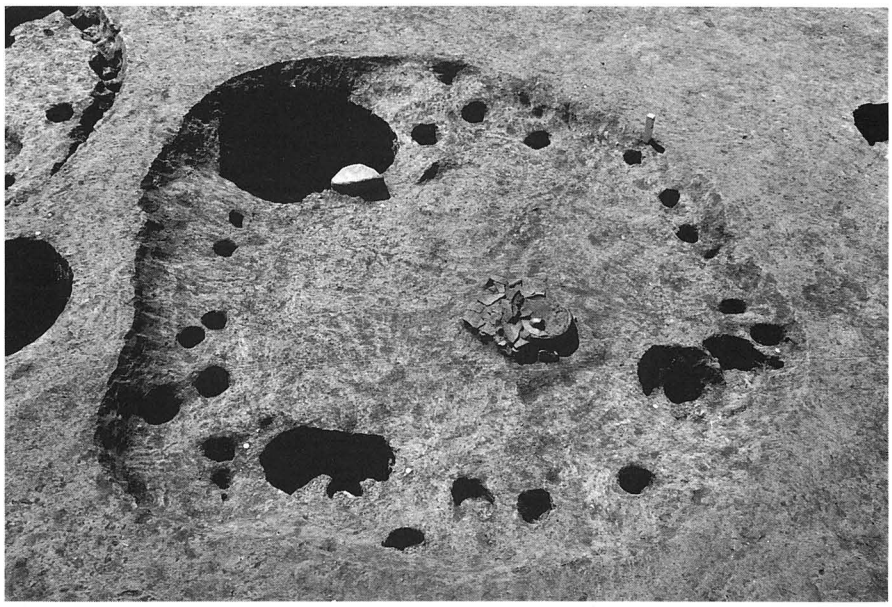
(1)　調査区全景



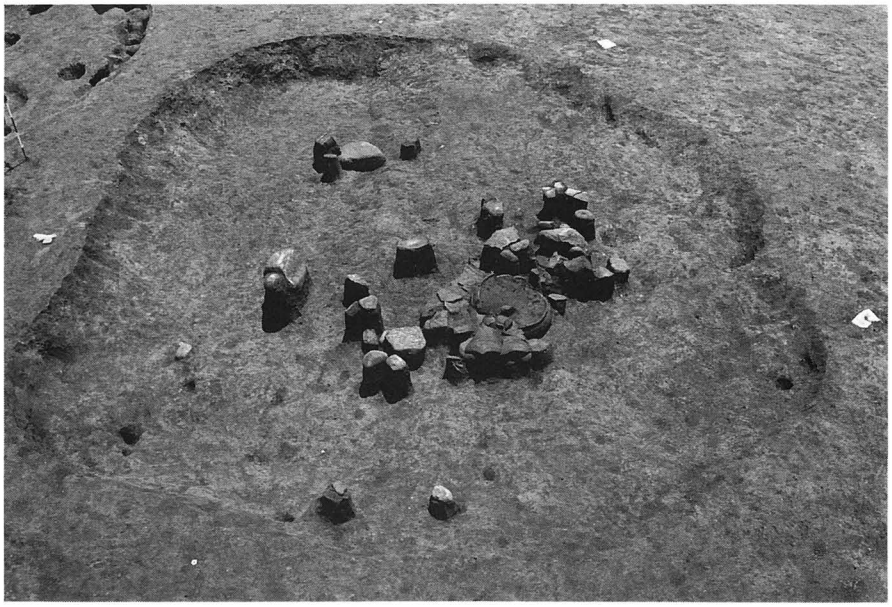
(2)　第１号住居址

(3)　第１号住居址
遺物出土状態

図版 2



(4)　第 2 号住居址



(5)　第 2 号住居址
遺物出土状態

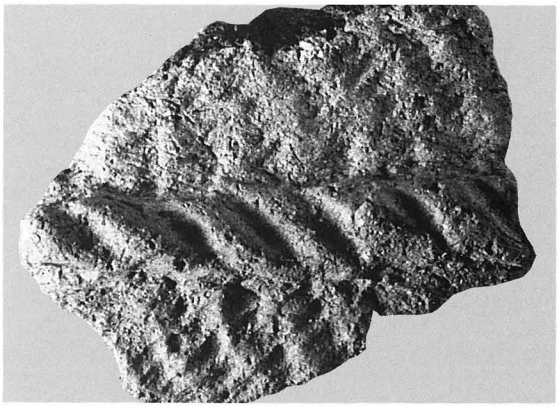
(6)　第 2 号住居址
遺物出土状態

(7)　第 3 号住居址

(8)　第 4 号住居址

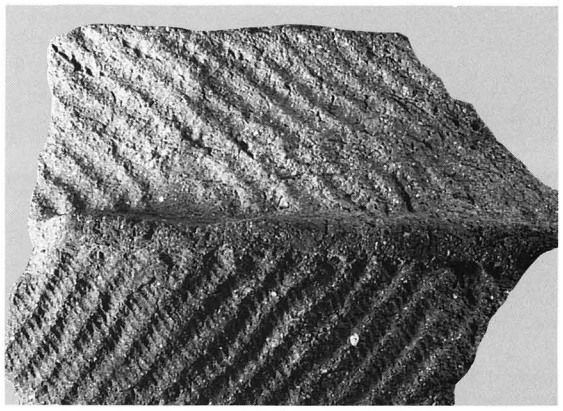
(9)　第 5 号・ 6 号住居址

図版 4

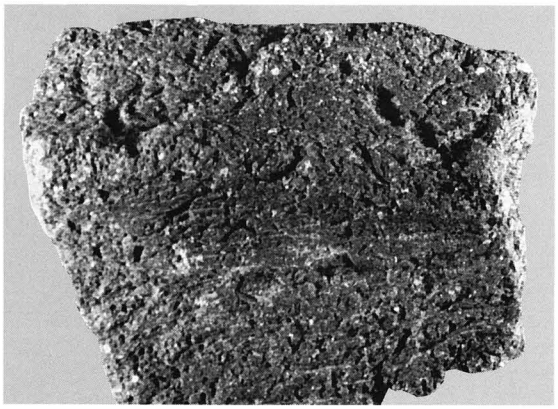


(1)　第Ⅰ群第１類ア種

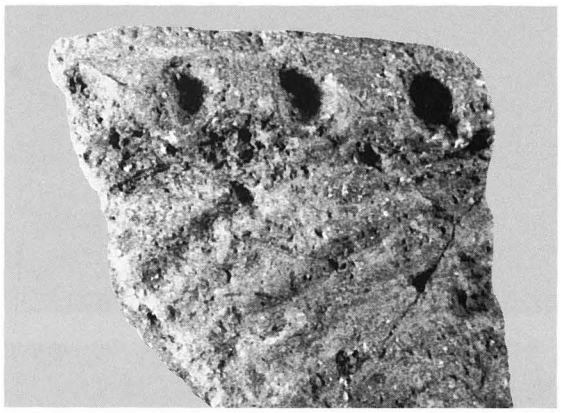
(2)　第Ⅰ群第１類イ種



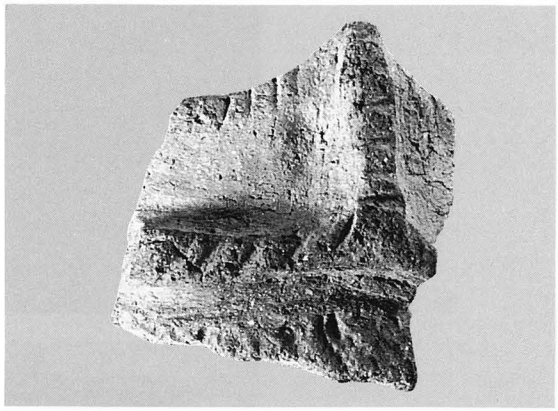
(3)　第Ⅰ群第１類エ種



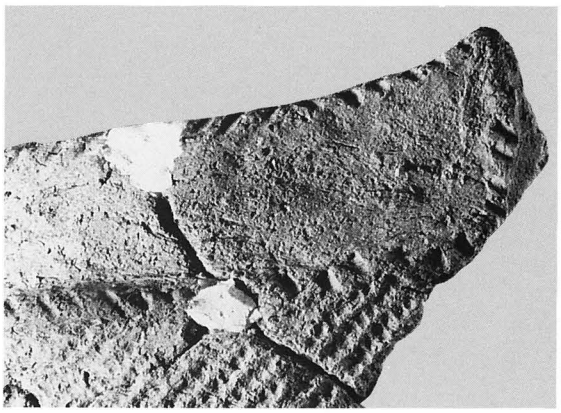
(4)　第Ⅰ群第１類エ種



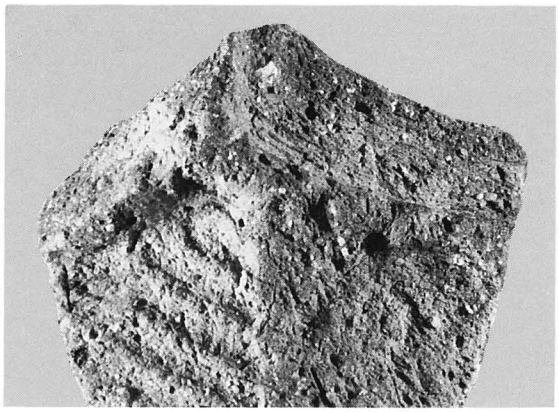
(5)　第Ⅰ群第１類ウ種



(6)　第Ⅰ群２Ａ類イ種



(7)　第Ⅰ群２Ａ類イ種



(8)　第Ⅰ群２Ｂ類イ種

買地遺跡出土縄文時代早期末～前期初頭の土器群

報告書抄録

ふりがな	かいちいせき
書名	買地遺跡
副書名	平成11年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	守矢昌文
編集機関	茅野市教育委員会
所在地	〒391-8501　長野県茅野市塚原二丁目6番1号　TEL 0266-72-2101
発行年月日	西暦2000年　3月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
買地（かいち）	長野県茅野市（ながのけんちのし） 米沢（よねざわ） 買地（かいち）	20214	312	36度 1分 57秒	138度 11分 12秒	1999.5.20 ～ 1999.6.30	939m²	県営圃場米沢地区に伴う時前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
買地	集落址	縄文	竪穴住居址　6 土坑　5	早期末土器片 スクレイパー・石鏃 剝片・砕片 中期中葉・後半 土器片	縄文時代早期末の集落址

買地遺跡

―― 平成11年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

平成12年3月17日　印刷
平成12年3月21日　発行

編集　茅野市教育委員会
発行　長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
☎（0266）72－2101㈹
印刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
☎（026）244－0235㈹